攝津名所圖會

住吉郡 二

中山前大納言愛親卿

凡例

一攝津名所圖會は全部十巻あり大略郡名ごとに分ち然れども東生郡西成郡は大坂市街の町續あれば郡名ふさず

一此書著述の體裁は舊史ふ百濟郡大郡小郡矢郡の名あれども後世形勢一ならざれば只今時の相をのみ順道ふされを記す

一任右郡の内今時攝津國ふ於ては攝津國ふ於ても舊史ふ基く場一津を和泉名所圖會ふされを著せる故ふ繁雜巻毎ふされ有く左右應照しがたく今時の体を暁をべし

一大坂市街ふ神廟佛刹多くして固より諸社の祭式の異なる朝市夕市の繁花又ハ彩艘の舶お泝り出帆歸帆ハ江口の風景ふ於ても圖一つならずして

一諸宗の子院末派の道場續寺等いふに及ばず除く祖都名所圖會の例ふ效ハ

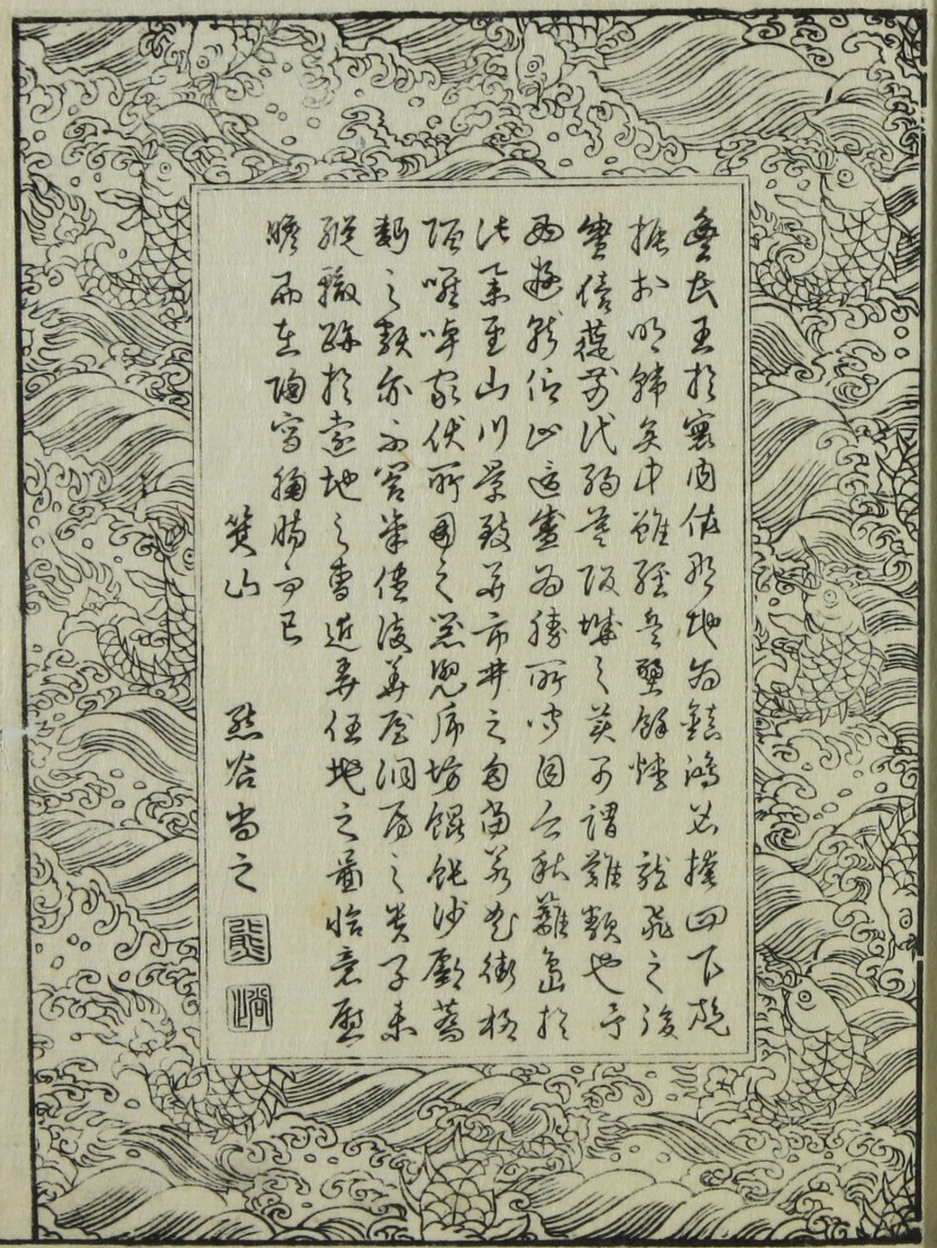
一寺社の細畫、竹原春朝齊の一筆好り故、小姓名印章かゝ
景物も画ふに至つそ志うらび罔是画面ふ姓名印章なくて
ちかし〳〵仕る

摂津名所圖會卷之一

目錄

摂津國號基
高津宮仁徳天皇紀畧
浪速始元
春日高蔭圖
大隅宮
住吉大神
住吉郡
秋夜愛鹿音画
味經宮
冬日散御綱柔依
延喜式郡名同次

火闌降詞　龍神山神跡　后土祠　江印殿　嶋津忠久誕生石
津守家館　淺村上帝行宮　仁徳帝　神馬舎　田裳見七祖
宝殿之石　神跡一所　薬師堂　東西二時堂
神宮寺　墨江　五大力　薬師堂　一層塔
津守寺　講堂　石舞臺　今主祠
持堂　鉾杵洗石　御田植　寶の矛
不動堂　若磯石　使者
六月潮湯
住吉里　住吉岸　住吉細江　住吉浦
住吉園　住吉津
長居浦　岸田　墨江池　長井濱　楯嵜　浄土寺
津守浦　長居池
渓松岸　出見濱　高燈炉
住吉名産　難波屋松　霞松原　遠里小野
牡蠣菴古蹟　淺澤　淺沢小野
籾濱　龍橋　惹恩寺　車之橋　子安地藏
獨梁橋　一休和尚墨跡　王子祠
住吉神輿燈臺所　淺香
極樂寺　正成燈爐　朴津　王子祠　吾妻
阿胡行宮　大聖寺　観音堂　薬師堂　護摩堂　稲荷祠　平野
新大和川　五福大祠　牛頭天王　神功祠　阪上家
淺香浦　船玉神社　大師堂　什宝　轉輪藏
楯原神社　西池　紹鷗森　不退場　累世塔
天滿宮　熊野権現　石表　安藤忠次墓
牛頭天王　和中散卿　長寶寺　田村堂　平野産物
大念佛寺　本堂　鎮守　恵光寺　百池
倉翠堂　同記　平野川　田蓑法楽寺　池田池
田蓑神祠　鷲住王家　大伴金村家






仁徳聖帝
眺高堂観人烟
免課役

浪速國　海濱數郡の總稱　今東生西成の二郡　又攝津と
雅波江　雅波浦　淀川の流れ入る海　又は大坂の入江
初期攝
なにはづ　津　みさくやむ　梅花今も盛なる浦風を吹
日本書紀曰
神日本磐余彦天皇戊午年春二月丁酉朔丁未日皇師遂東舳艫
相接方到難波之碕會有奔潮太急因以名爲浪速國亦曰浪華
今謂難波訛　訛此云與
倭姫命世記　神武天皇東の國を征伐し給ひ浪華に到り給ふ
大明一統志及大學衍義補　日本在東海之中古称倭奴國改曰日本以其國近日所出也又
武備志曰畿内州五山城大和大河内大和泉小攝津大統三十三郡云云
後拾遺
なにはづや　ふたの國　攝津國　畿内五箇國の其一なり　畿内とは王城を畿さ内の邦として
半ばより畿内風俗の
大明一統志及大學衍義補　唐書。宋史。太平御覽。太平廣記。皇朝類苑。等に見えたり
武備志曰畿内州五山城大和大河内大和泉小攝津大統三十三郡云云
なにはづや　ふたの國　攝津の國　此雅波つの
應神天皇の御宇初て攝津の國號あり　萬國の海船あつまり集會するの
義と攝の萬船と書ひおさむるの額津ともいふ　神代より
大已貴命の御女下照姫天磐船を駕してあまくだり
高津と號けあれ攝津國の始えなり
難波高津宮　仁德天皇　名大鷦鷯尊
即位の御時初る皇居なり　誉田帝
容貌美麗之壯年より連んぐ益仁寛慈恵を坐す　應神帝崩じ
御子四人仲哀命五百城入彦皇子の孫之天皇幼より聰明叡智ありて特に
あり時第五の皇子菟道稚郎子を太子となさんと御遺詔
あり故ありし君大鷦鷯尊を
で天業に登んと年あらそひ　大王の風姿岐嶷ありて仁孝厚し天下
の君とあふぎ足ふまうと思ひしと
あるに古今常典之頼べ帝位を昇りまいの臣とあらんと宣ふ大鷦鷯尊
對て曰先帝あなたの皇位一日も空しくつぐべからず須明徳ある
選て寶祚を嗣民を撫べし我先帝の命を棄ん事

王の願ふ従んやうく辞〳〵昔ゑび各相譲り申〳〵事 郤く空位
二載を経り時ふ海人鮮魚を費く菟道宮ふ献ぢ太子海人ふ云我
天皇ふ非ど貢を受ゑ得ず〳〵とく応〳〵 経波宮ふ 献ぢを亟〳〵
大鰐鰐尊亦応〳〵く菟道宮ふ献〳〵む於是海人の鮮魚徃還そ
の故ふ又他の鮮魚を献ぢ相攘事 数日のめ〳〵鮮魚も亦
海人苦く鮮魚を棄く大ふ哭ぢ太子の曰我兄の志ふ奪ふべうに
豈久〳〵く生く天下を煩ぜんやとく終ふ自死ゑひ忽大鰐鰐尊
太子の薨ゑひ〳〵事ふ従ひく経波う菟道宮ふ馳て大ふ叫哭く
天ふ仰き地ふ跡ふ髪を解屍ふ跨く救日涙泣〳〵棺手伏〳〵ゑ〻
素服をまうく菟道の山上ふ葬ゑまる 今宇治離宮八幡 是ふ石積墓
の書紀士王仁諫奏〳〵く曰阮ふ空位二年ふ逮ぐ〻君の愁を天下の
愁ど早く登極ゑ〳〵めく民の煩を念〳〵宝祚延長あ〳〵四海の安
きれふぬんと頻ふ勧まう難波津の賀詠を献〳〵ゑ於是

え年春正月大鰐鰐皇子即位〳〵ゑ〻難波ふ都あうくまれを高津宮
仁徳天皇と稱〳〵まる宮城の宝屋ふ弗堅名楠梁柱楹弗藻錦芽茨弗
剖齊〳〵く国政に私曲なく耕績の時を教ゑ〻
四年春二月羣臣ふ詔〳〵く曰朕高臺に登うく遠く望ふ烟気起ぢ
思〻ふ域中百姓既ふ貧〳〵そ家ふ炊事ふ〳〵今朕億兆ふ臨んく二年ふ
萬民徳の吉ふ誦神て家々富栗そと於〻今朕聞古の聖王乃代ふ
おうめ頌吉聆ぢ炊烟ひろく〳〵疎之今歳五穀不登〳〵て百姓窮尽
封畿の中ふゑ史況や畿外諸国をやと宣〻同年二月 詔〳〵く曰
今〳〵う二載ふ至うまそ悉課役と除く百姓の苦ふ息〻ゑ〳〵是日ふり
始て蘭衣鞋屨幣盡ざれど更ふ易ゑぢ温飯煖羹酸鮮をぞれを
易ぢ心を削志ふ約く天業と切りしゑ〻因是宮垣崩とも造ぢ茨
茅茨壊とも葺ぢ風雨隙ふ入うく御衣を沾〳〵星石漏壊れうう
入うく病ふ亦蓐〳〵是后風雨時ふ順く五穀豊穣ぢ三稔の間ふ

文鵠鵲の皇子
大中大人命闘鶏せふ
催しひ氷室を見給
いうるわざし問うお
菱月熱ざる比酒を
漬ご用ゆし給
皇子将ゐりるひく
帝よ献るうと氷室
の奏の始うと

文載
下呼う
知べ遣
さえ
言やと
仲正

百姓富寛と成頌徳既に満ち炊煙も亦繁し

七年夏四月　天皇臺上に居て遠く望みたまふに烟気多く起つ是日
皇后に詔て曰朕既に富て豈愁あらんや皇后對て曰何をか富てや
謂ふや天皇曰烟気盛に国に満つ百姓おのづから富り皇后又言ふ宮垣
壊れて修理わく殿屋破れて衣被露ふ何をか富とせん天皇曰
其れ天の君を立る事は百姓を以て本と為是以
古の聖王は民一人飢寒すれば顧て身を責人百姓貧しき則は朕が
貧きこと百姓富る則は朕が富と百姓富て君の貧いまだあらざる同八月
貢を免し復二年ふりぬれば宮殿朽壊し府庫已に空し
今百姓富饒み里に鰥寡の者なく仏神貢をもて宮室を修
せをんや其罪を天に獲とも
十年冬十月南て貢ぐ捧て宮室を構る百姓老少を引ぐ材を運び
簀を負日夜と問ぐ力を竭し幾時ならずして宮室
悉く成ぬ於今　聖帝ありと稱や

十一年夏四月郡臣に詔して曰今朕仏国の郊澤曠遠にして田圃
少き是以の水横に逝く流未駄を知ず
逆理にして素より道路の遥なる故に君臣を使ひ命じて流を決
を塞ぎ田畑を全ふせ冬十月宮の北十方の郊原を掘て南水を引て
の海に入しむ是を堀江と号

十四年冬十一月猪甘津に橋を架て渡す是茅渟大道を京の
中に通く南の門より直に丹比の邑を指す又大溝を感玖に掘て石河の水を
引く上鈴鹿下鈴鹿上豊浦下豊浦四處の郊原を潤し萬頃の田を墾
得ん故に其所の百姓寛饒み
十七年新羅朝貢をこたる秋九月的臣の祖砥田宿祢小泊瀬造の祖賢遣
臣を遣して問しむ新羅人懼て貢献る調絹一千四百六
十疋及種々物并て八十艘

仁徳帝
八田皇女
女房
雌鹿
松のおん
おもひ
兎筵所の
赤のまと
風
寒
あひだ
愛し
と

さとこゝろの
妻をおもひて
帰雁の
なくこえきけば
秋ぞ
人恋

三十年秋九月皇后本國ヲ遊リシテ熊曾ノ岬ヲ到リ弟其所ノ御綱葉ヲ取テ御船ヲ飾リ還リ坐ス是日天皇皇后ノ不在ヲ伺テ八田皇女ヲ娶リ宮中ニ納ル時ニ皇后雅波ノ濟ヲ到リ天皇八田皇女ヲ娶リ坐ス聞テ大ニ恨其採ル所ノ御綱葉ヲ海ニ投入テ悉ク其船ヲ焼故ニ時ノ人號テ其地ヲ曰ク雅波ヲ御津ト云ヒ初リ海ニ投入テ著岸ヲ悉ク焼故ヲ時ノ人號テ其地ヲ曰ク雅波ヲ御津ト云ヒ初リ

三國史記曰　此書者記ス新羅高麗百濟三國ノ事ヲ有リ五十卷所謂與東國通鑑粗有異同已下西峰松下見林編集之出ス異稱日本傳

訖解尼師三十五年春二月倭國遣レ使請レ婚弊以女飢ニ出ス嫁ニ

今按三十五年當ニ日本仁德天皇三十二年ニ與通鑑異ス

同三十六年二月倭王移レ書絕レ交

今按三十六年當ニ仁德天皇三十三年ニ與通鑑同レ

同三十七年倭兵猝至レ風島ニ抄ニ掠邊戶ヲ又進圍金城ニ急ニ攻ム王欲ス出レ兵ヲ相戰ヲ伊伐飡康世ヲ曰賊遠至レ其ノ鋒不レ可レ當ニ不レ若カ緩ニ之ヲ待ニ其師ヲ老ヲ王然ヨ之ヲ閉ヲ門ヲ不レ出ヲ賊食レ盡ヲ將ニ退ヲ命ヲ康世ニ率テ勁騎ヲ追擊テ走レ之ヲ

今按三十七年當ニ仁德天皇三十四年ニ

三十五年冬六月皇后磐之媛命筒城宮ニ薨ス（筒城宮ハ山背ノ國ニアリ）

三十八年春正月八田皇女ヲ立テ皇后ト次ニ秋七月天皇皇后ト俱ニ高臺ニ居テ避暑ヲ時ニ毎夜兎餓野ヨリ鹿ノ音聞ユ其聲寂寥ニシテ悲ム共ニ憐ノ情ヲ起シ皇后ニ語テ曰是夕鹿ノ音甚ダ悲シ何ノ由カ然ルヤト皇后答テ曰妾聞ク鹿ノ鳴ク聲ヲ其ノ雌ヲ對ク言ヲ其ノ牡鹿之ヲ臣苟モ貢ヲ獻次天皇膳夫ヲ令レ問ニ其ノ故ヲ膳夫奉テ勅ヲ往テ問ニ其ノ故ヲ答テ曰鹿ノ鳴ク聲ヲ其ノ雌ヲ對ク言ヲ其ノ牡鹿之ヲ妾ノ如キ賤妾ノ身ヲ天皇猶ホ不レ忘レ之ヲ況ヤ皇后ヲ乎ト膳夫還テ奏ス之ヲ天皇聞テ之ヲ益ス憐ム之ヲ今ヲ以テ推ス之ヲ佐伯部ノ獲ル鹿ヲ適逢テ獲ラレ事ノ有ル故ヲ佐伯部皇居ヲ近ク事ヲ有司制シテ安藝國ノ淳田ヲ移郷ス今淳田佐伯部ノ祖ト俗云昔ヲ人有テ往ク兎餓野ヲ宿ヲ聞テ牡鹿牝鹿ノ呼ブ聲ヲ悲ム外次將ニ鷄鳴ヲ牡鹿牝鹿ヲ呼ブ聲ヲ吾ガ如キ事有リ向ニ君ヲ吾ガ君ヲ吾ヲ棄テ何ノ所ニ往ク吾身ヲ殺シテ君ノ祥ヲ吾ガ牡鹿牝鹿ヲ答ク聲ノ出

り前みて必人のねふ射らま死んヨ汝が塩を其身ゟ塗まてんまれ窮の素ゟ懲
ありし時ゟ宿人心の哀ゟ異しことを次未昧爽ゟ及さる先猟人壮年を射て殺しつ
是以時の人諸云鳴壮年も随相夢ゟ
二十九年夏五月始く詔ありく菖蒲を献ぜ和漢合運
四十二年秋九月酒君ゟ鷹ゟ逸ちく百舌ゟ鳥ゟ悪小草ゟ中ひ遊猟し
為人要ゟ以下任吉郡鷺耳邑ゟ
五十二年新羅国朝貢せ次毛野の君ゟ祖竹葉瀬を遣しそ撃しむ
殺百人を殺し四邑の人民を虜とて次
同巻第三 新羅本紀云 奈勿尼師今立つ九。年夏四月倭兵大ニ至ル王聞ク之ヲ恐レ(三云那密)不レ可レ敵ス造ニ草偶人数千ヲ衣レ衣ヲ持レ兵ヲ列ニ立テ吐含山下ニ於ケ伏ス勇士一千ヲ進ム伏シ発シ撃ニ其不意ニ倭人大ニ敗レ走ル追撃殺レ之ヲ幾ト盡レ今俊九年ニ当ル仁徳天皇五十三年ニ與通鑑同
五十五年 蝦夷叛そ田道ゟ遣しく撃しむ
五十八年葵五月荒陵の松林の南ゟ道ゟ塞ゟく忽両の歴ゟ路ゟ挟ぐ
未ゟ同年十月呉国高麗国相並ぐ朝貢を献る
六十二年葵五月遠江国の司表ゟ上つく曰大樹あり大井河ゟより流て河の曲
ゟ停ゟ真ゟ十圍ゟ一ゟ丈ゟ赤ゟ両之時ゟ倭直吾子籠を遣しく船れ
造しゟの南海ゟり運しそ雄渡津ゟ将来ゟ河ゟ船小宛ッ是茱顔田
大中表皇子闕勲ふ欄を討ゟ皇子山上ゟり眺く聖中を瞻ゟふ勅あり
其形盧のめし仍て使を遣して向さく云真聖中ゟあるりのゟ谷の窟を穿て
曰氷室ゟり皇子曰真中ふ蔵ゟ如ゟのゟあぞ土を丈仍掘さ草ゟ其上に
蓋ひ敷く茅萩を敷く氷を真上ゟ置院ゟ葵月を屆く洋ゟ真由事ゟ郭
熟月ゟ宿しく漬水く用ふく皇子則其氷を蔵む是氷室の始えあり
大ゟ歓のふ是ゟり已後年毎ゟ季冬ふ必氷を将来く御所ゟ献る天皇
天皇夙興夜寝軽賦薄斂し民ふ徳を萌布恵必ゟ施し国窮ゟ振ひ
死ゟ弔ひ疾ゟ向孤孀ゟ養ひ是ゟり向く政令ゟ流行しむれを天下
太平ゟり二十餘年無事ゟりつ

仁徳帝の
皇后木國
熊野へ到
御網葉と取
船へ乗
帝八田皇女を
つれ愛〻へと皇后
宮へ
御網葉を海へ投入れ
葉の
ツヽ

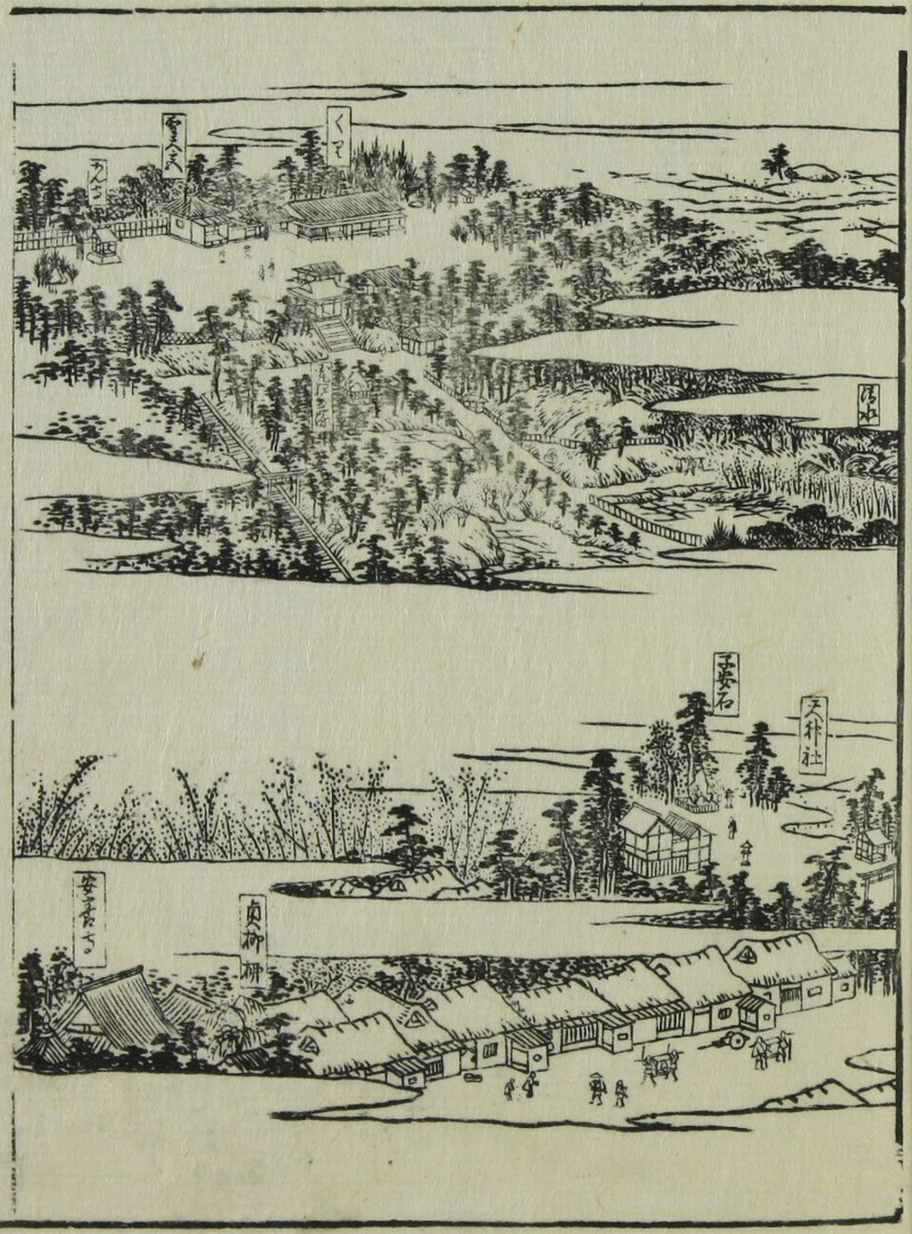


難波往古の
圖を考ふ
今の地里の
ツヽ
又或ハ云大坂
の
上塩町
より丁目
桃谷へ
当る道と
是昔の
玉江川
潮逆流る
所へ
御網葉より
難波へ御津と
ツヽ



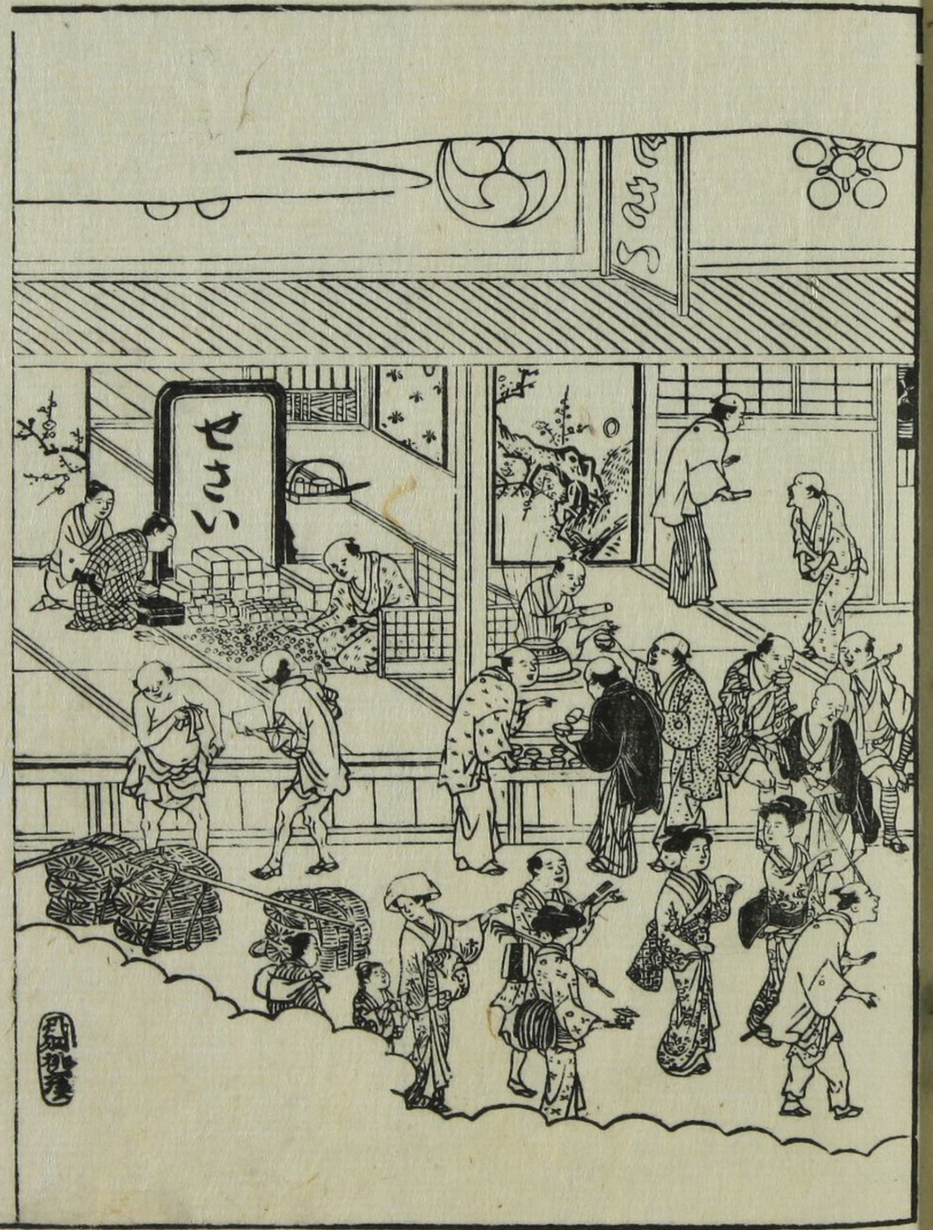
同三十八年夏五月倭人來圍金城五日不解
將士皆請出戰王曰今賊弃舟深入在於死地
鉾不可當也閉門固守賊無功而退王先遣勇騎
二百遮其歸路又遣步卒一千追於獨山夾擊
大敗之殺獲甚衆
今按三十七年事本紀曰倭人自稱王以使來朝
又卷第十六
爲第二十五代仁德天皇八十一年逼鑑
爲第十六代仁德天皇八十一年逼鑑
今按仁德天皇七十八年歲在庚午
今按仁德天皇八十七年歲在己巳
今按仁德天皇八十八年歲在庚午
十一年夏四月倭國求大珠三年二月遣使者至
十二年春二月倭國使者至迎勞之特厚
十四年秋八月百濟人未朝十六年王薨
十五年夏五月王與倭國結好以太子腆
支爲質
西晋大元十五年當之
十七年事本紀曰
百濟阿花王薨天皇召直支王謂之曰汝返於國以嗣位仍賜東韓之地而遣
之明年按直支薨
即子久爾辛立爲王王年幼大倭木滿致執
國政與王相爭多行無禮大皇聞而召之
八十七年丁亥正月十六日天皇崩於
大陵
聖壽百十歲
秋歌
春の夜は月ふきわびぬる高津の宮の匂ひ梅うえ
覺通法師
金葉
いにしへの經波の聖代ぞ戀しき高津の宮ふ月のさやけき
參議師頼
聖帝の御代も耳慕其唐土流れ鳳凰其樹ふ巢ひ
笑龍其沼ふ遊び麒麟其園ふ臻る神雀其林に棲是ふか皇德乃
祥瑞ふ〳〵天下清平の代と成我
深き恩れ分明ふ聖帝と賞じ
仁德帝ふ舍人親王持ふ懇毫を
桓武帝ふ京師平野神社ふ崇
ひ百王の冠と〳〵ふ世ふ太平ふ
賞ぞる言葉ふ遠き中葉の芳舜
の代といふふ迄ふ我
仁德天皇の御代ふ比せんといへるなり

天下茶店邑
三人神祠
紹鷗茶
茶亭
聖天山

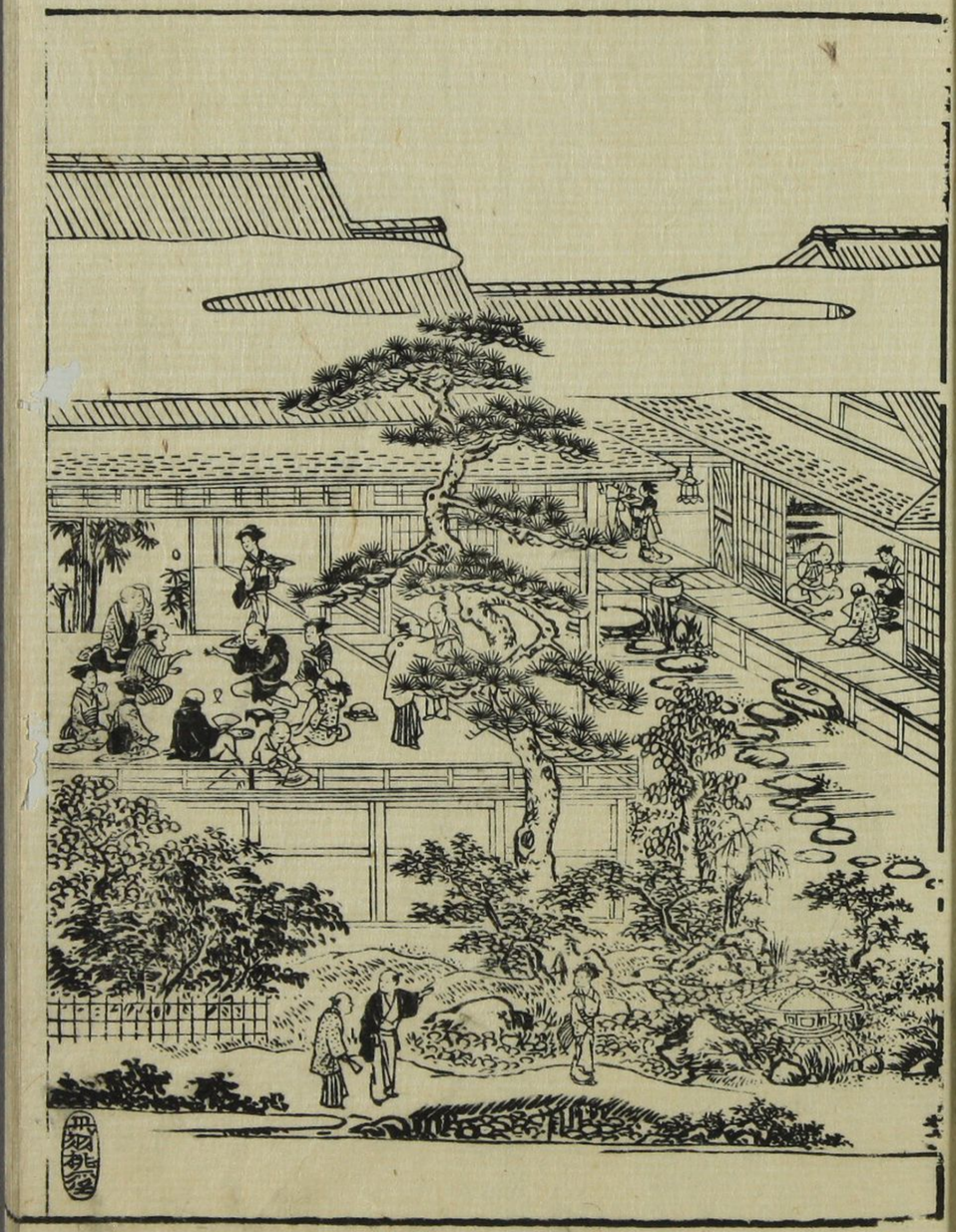


天下茶屋村
是齊茶店





住吉新家
二文字屋
貸食店





住吉新家
伊丹屋柏戸
坐敷庭者

大隅宮　應神天皇の離宮なり按ふに仁徳天皇
大宮なれば此も宮なるべし　古蹟は西成郡
長柄豊碕宮　孝徳天皇の皇居　古蹟は西成郡
　　和名抄上摂
　　万葉稚紋上摂　和名抄上摂
あるべし　同郡
　　万葉稚紋上摂
いまゝへの長柄の丈にはもあらず　橘枝しるき朽果る世手　萬金抄
味經宮　同帝の離宮　古跡は仁徳帝故宮の北の方に在るべし
　　和名抄上摂　万葉稚紋上摂
なほ西ほうしてに含むべし　あちこちの丈ちこれとあるべし
　　万葉稚紋上摂
田鶴のかくのゝへの注ふかめれど味經の丈ふさはしからず　雑記古覧
天武天皇二年冬十月攝津職を置天平十六年二月難波宮なりしを定て
皇居とせしが同十七年復平城宮に還り延暦十二年三月攝津職なり
罷て國司となし天長二年三月江南四郡を分て和泉國を建次夏四月國
治なり豊碕の郡家以南を遷して美和十一年
十一月鴻臚館なりしを國府となし建武年中の内亂に楠正成兼て本國を守る
延元元赤松範資の西の地を掠略次文和元年に佐々木秀詮これに代る

應永七年細川賴之守護を勤る厥后亂國となりて諸侯威を爭事九年
八十四年明應中蓮如上人本願寺を大坂に建大正の初頭如上人城となり次
織田侯諸將をしてこれを攻るに至る十二年豊太閤其城を益拓して立居しより
延喜式曰攝津國十三郡　住吉　百濟　莵原　八部　或は矢田部　有馬
　　名義しるく百濟郡の名あり　東生　上古は難波
　　已上三郡上古渾て
　　一嶋となり
能勢　和銅六年九月攝津職奏して
　　路嶮難の由を以て
雄次請ふ所なり
　　郡司を置
　　郡玖佐々村山遠隔して通
　　今の能勢郡これなり
倭名類聚鈔曰田一萬二千五百二十八町百七十八歩　正税十八萬五千束　本稻四十八萬束
雜稻十一萬束　見稻簿曰米三十七萬二千一百七十八石八斗七升
抑當邦は海陸の都會天下の要衝なり西州の喉口　皇州の閫域
なり群峯右に繞て平疇左に連る澱水は内を貫き江海は外を抱く
乃ち攝腴海涘の廣衍澤國の佳致なりて此國
小稱せらる

住吉神社

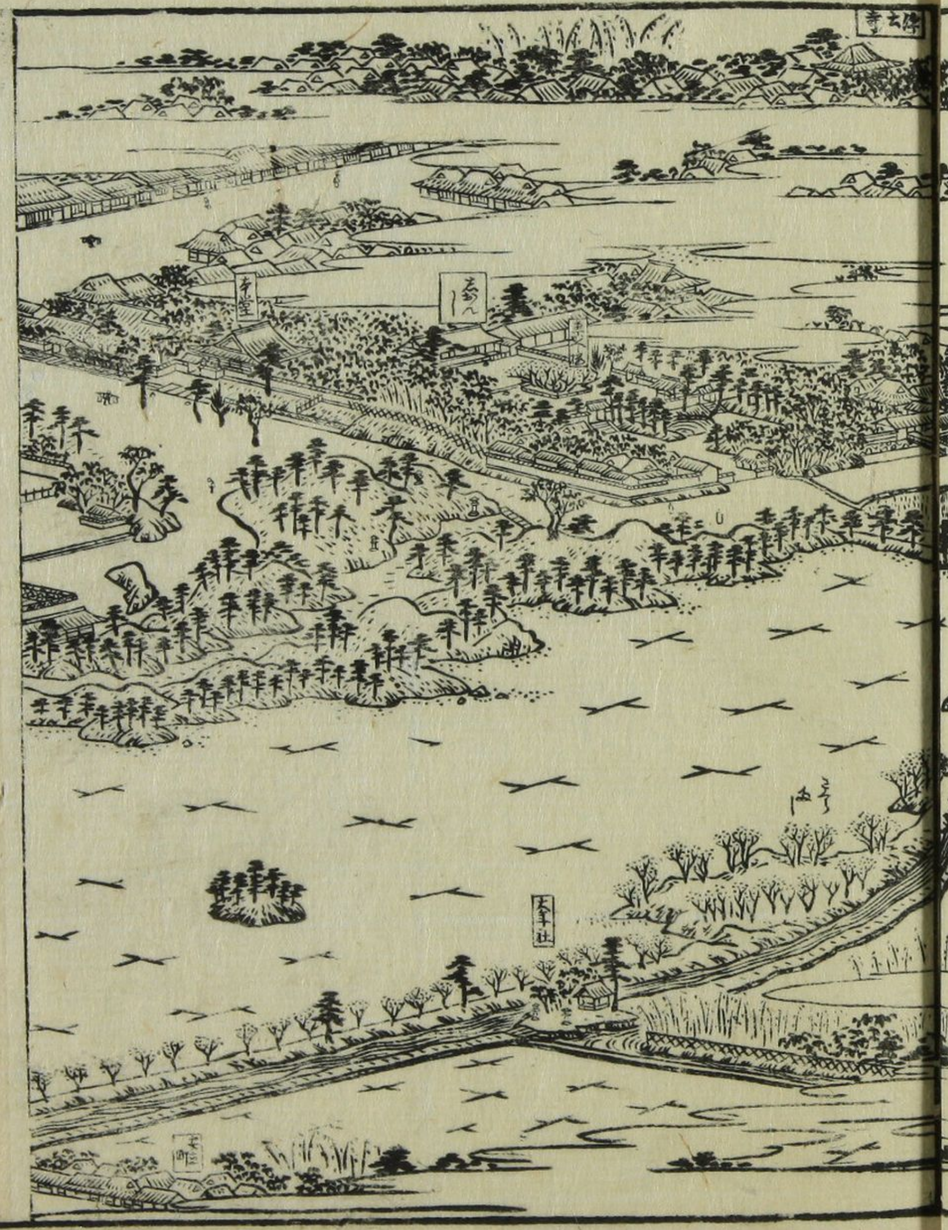
津守殿館

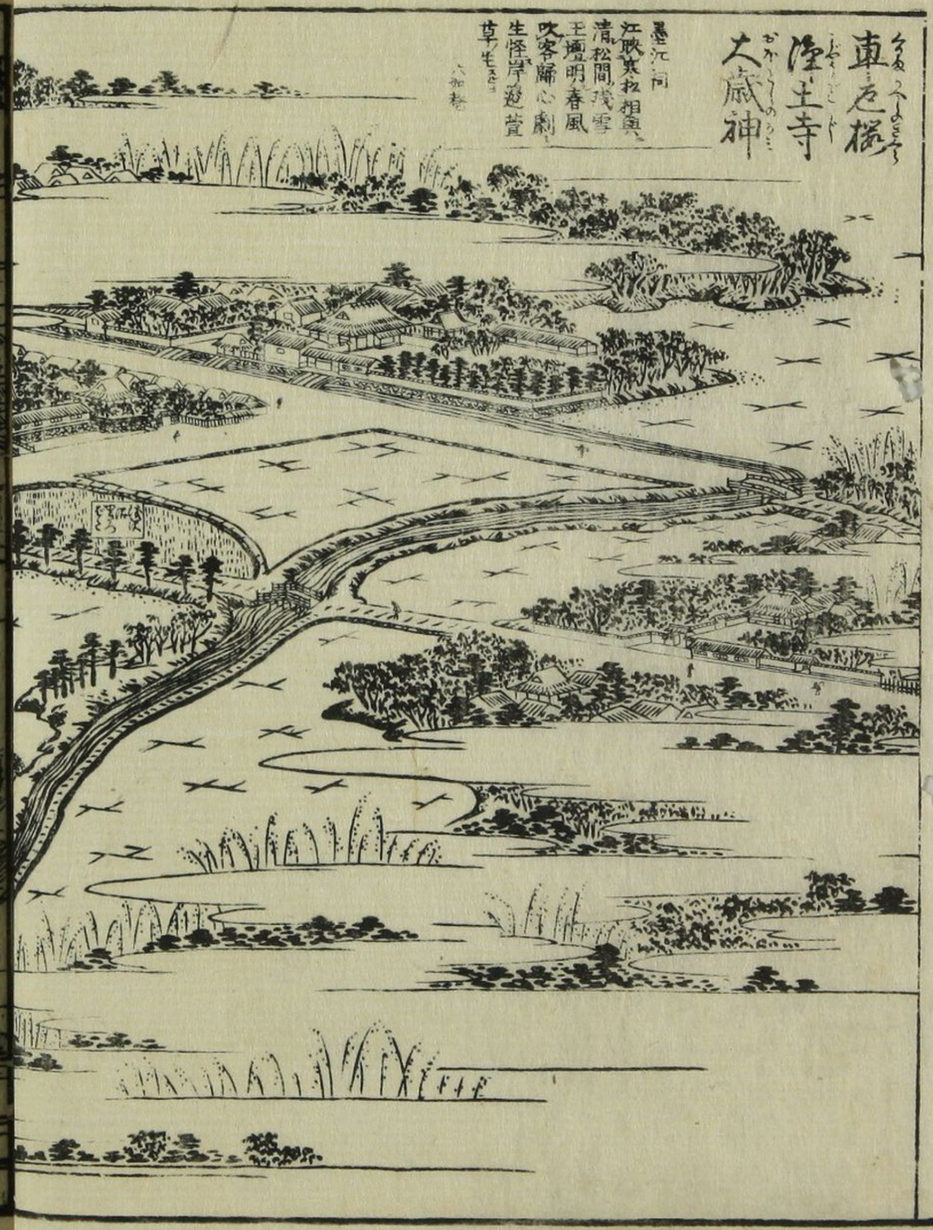
後の後院
帝君をわれのみ思ふ
祈らかる代こそ
深うれ神のまつこ

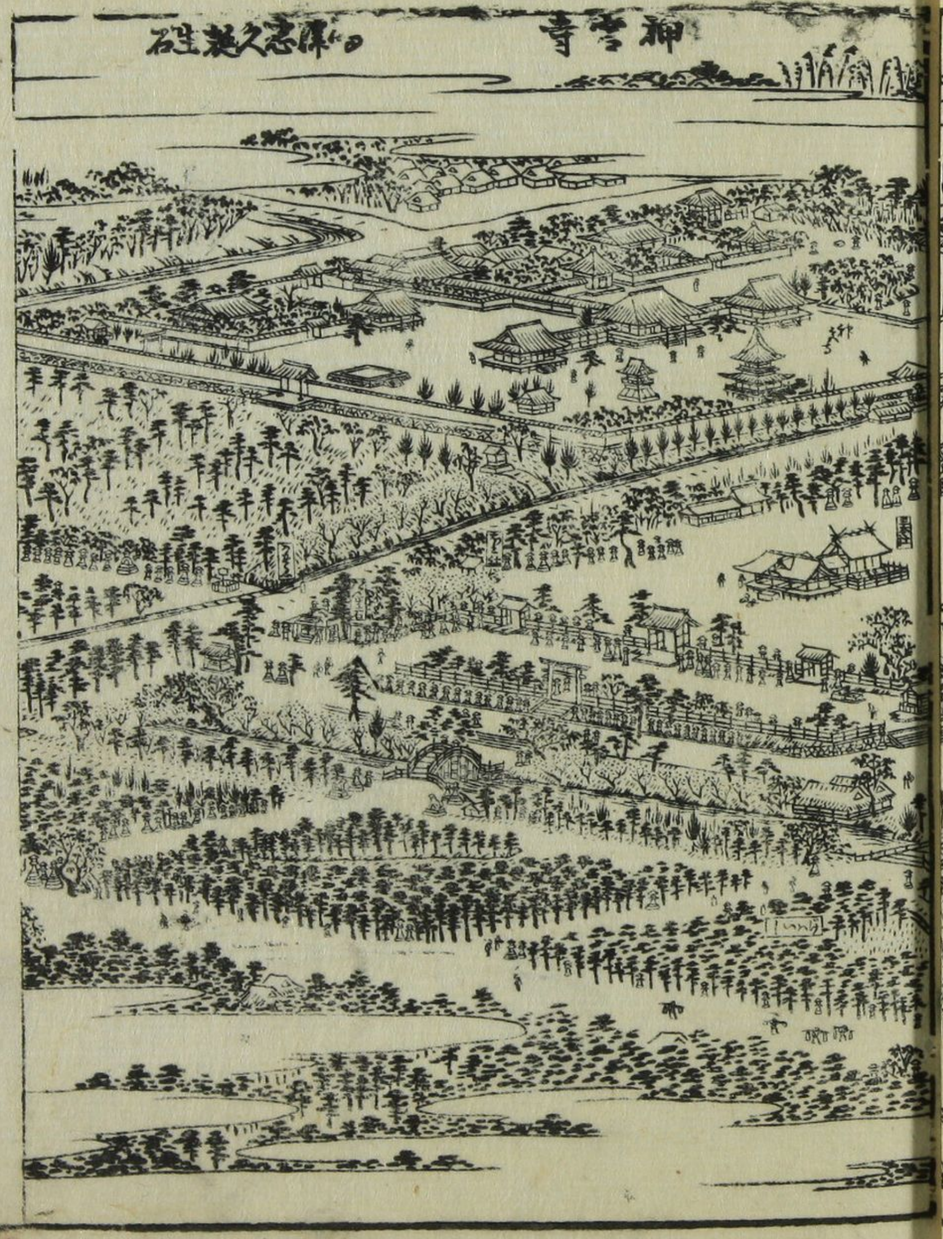
津守國基

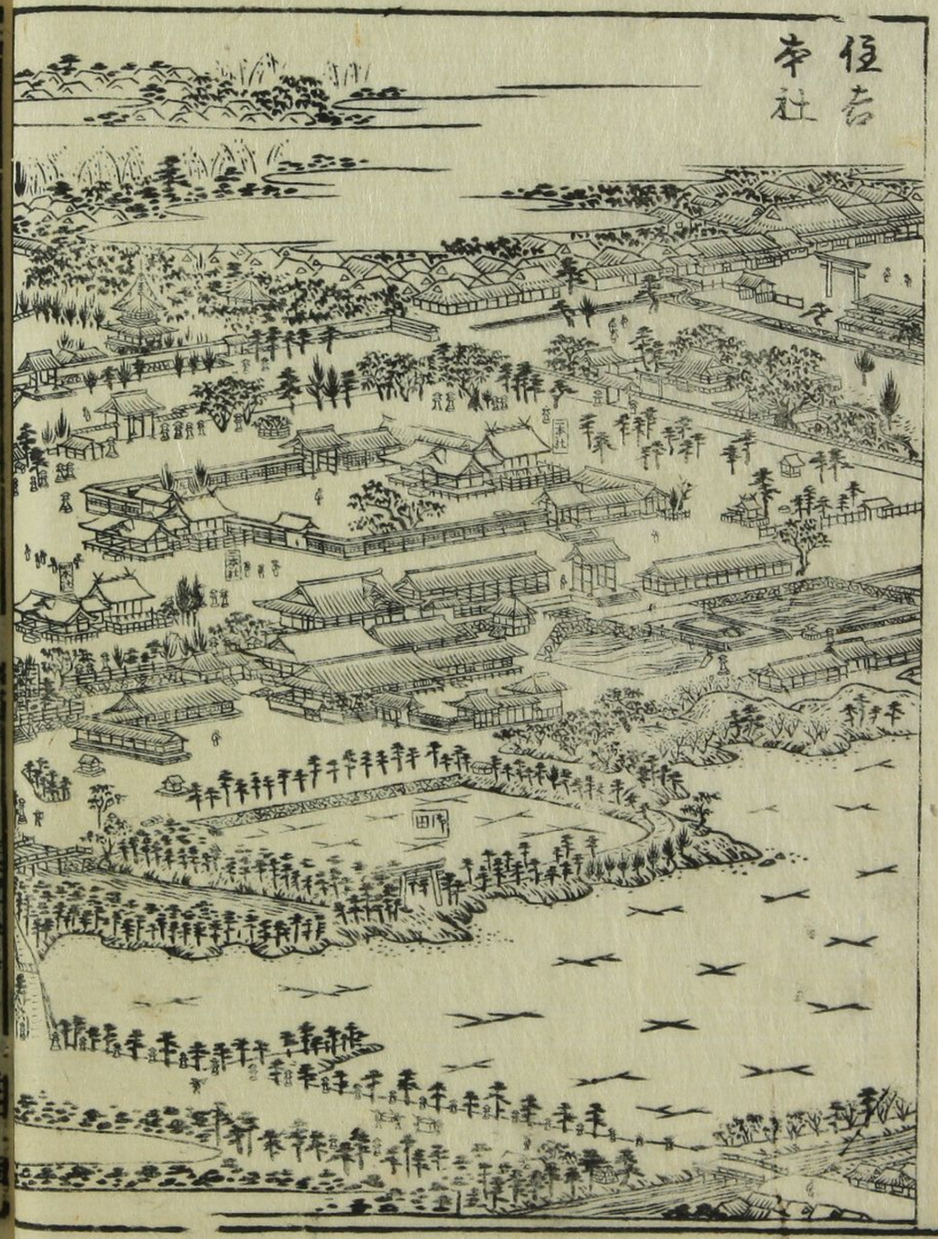
東叡山 浅草寺 大威神

墨江一同
江眺茅柁相逐
清松間殘雪
王塩明春風
吹客歸心劇
生怪岸迎萱
草ノモエ

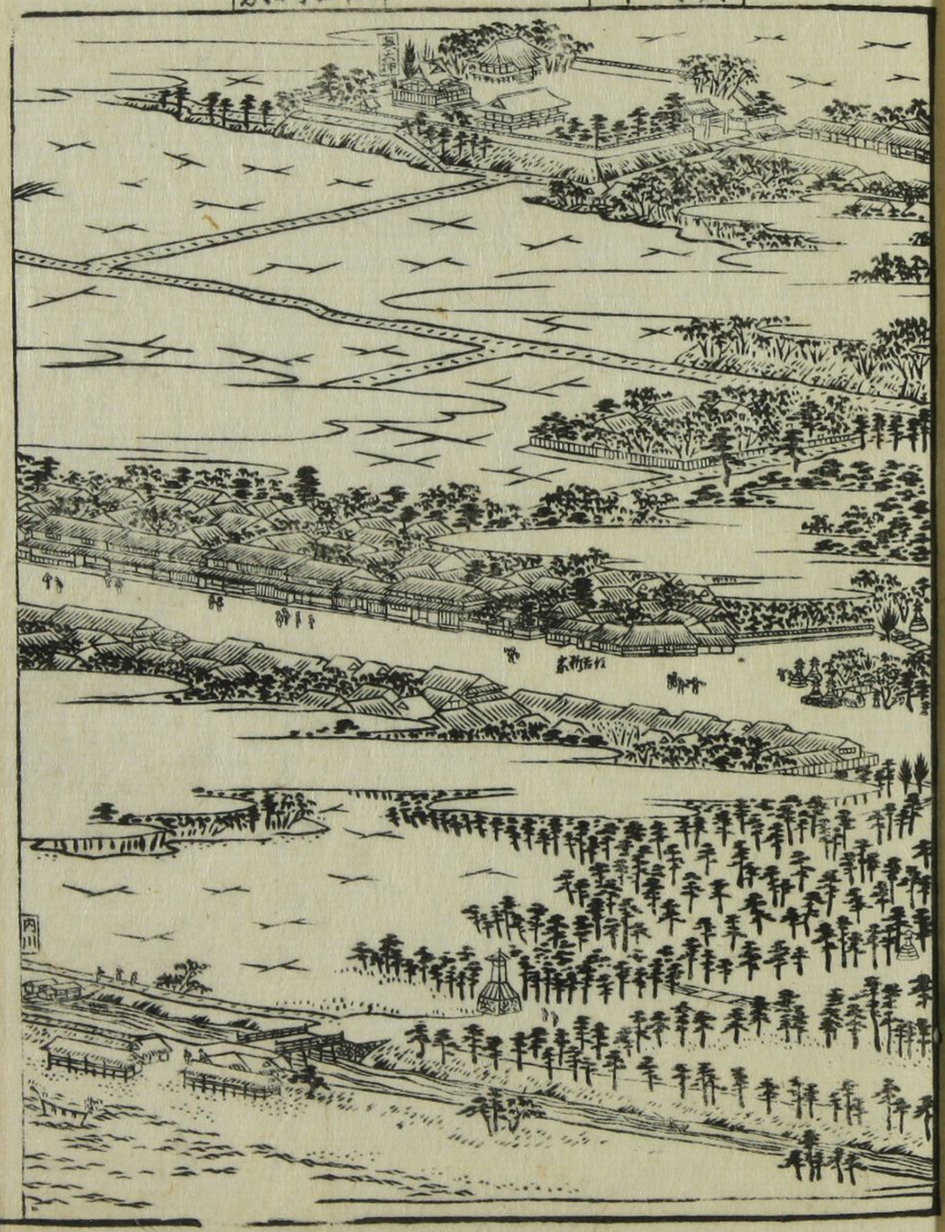





神宮寺
石清水八幡宮


住吉社
本

奥天神



住吉新家

大海神社



帝塚山

住の江のかみつゝきし田の面ふく風よ住吉の岸

住吉

新田

上川

住吉里

家居ふかき里の海辺は名にうつみ住吉の岸

住吉郡　東ハ海ノ内江丹比ノ八上之郡ノ堺ニ至リ西ハ海濱南ハ和泉大鳥郡ノ堺ニ至リ北ハ東生西成ノ二郡ノ堺ニ至ル

住吉大神社　住吉郡ニ在リ延喜式云住吉坐神社四座名神大月次相嘗新嘗

續古神祇　西の海やおそろしくの沖つ波よりわくれ出し住吉の神　卜部兼直

祭神　一神殿　底筒男命　二神殿　中筒男命　三神殿　表綱男命　四神殿　神功皇后

日本紀曰　伊弉諾尊既遷乃追悔之曰吾前到於不須也凶目汚穢之處故當滌去吾身之濁穢則往至筑紫日向小戸橘之檍原而祓除焉遂將盪滌身之所汚乃興言曰上瀬是太疾下瀬是太弱便濯之中瀬也因以生神號曰八十柱津日神次將矯其柱而生神号曰神直日神次大直日神又沈濯於海底因以生神號曰底津少童命次中筒男命又浮濯於潮上因神號曰中津少童命次表筒男命凡有九神矣

其底筒男命中筒男命表筒男命是即住吉大神矣

古事記曰　底筒之男命中筒之男命上筒之男命三柱神者墨江之三前大神也　同巻云　天照大神之御心者亦底筒男中筒男上筒男三柱大神者也　此時其三柱大神之御名者顯也云云

同記曰　神功皇后御船之波瀾押騰新羅之國既到半國於是其國王畏奏言自今以後隨天皇命而爲御馬甘毎年雙船不乾船腹不乾柁檝共與天地無退仕奉故是以新羅國者定御馬甘百濟國者定渡屯家尒以其御杖衝立新羅國主之門即以墨江大神之荒御魂爲國守神而祭鎮遷渡也

古今集ノ序ニ云　伊勢物語云むかし男ありけり其男身をえうなきものに思なして京にはあらじ東の方に住むの國にゆきて住所をえてなむ有ける或人いとねんごろにいひける女をかの國にやりてけり男かずならぬ身なれば思ひわづらひてなむ有ける　開疑抄云　文徳天皇天安二年正月廿八日りをとゝ國史實錄もし是にえひかず文徳帝の御製とうたがふ事なかれ　拾遺　あるじなくあれまくうしと春霞たつをみやこのしるしにはせよ　業平の歌と云ふ事なかれ

新古今 又伊勢お荷云 おほん神ぐらゐしゐひる
むかしゝ君いもゝ波瑞離れ久
賀茂真淵云現形ゝゐひてゝ今の本れ圓誤ゝ神現ゝ化而と古本ふめるれと影も
あやまりるゐゝん又此有ゝ真淵の説論なゝゝ伊勢お荷の古意のおも要ゝ
新後拾 橘の小戸れ汐瀬ゐおゝうれくむゝぬゐゐゝ神やゝ神 津守國基
拾遺 おゐそうたゝゝんゝこのおひおゑとれりんは久ゝゝ住吉の松 安法法師
まけ大神ゝ子平振神代の御時日向國小戸の橘れ檍原ゝう現とゐゝ
當社の御鎮坐ゝ 神功皇后紀十一年辛卯四月廿三日と卯 帝王編年集成 故ゐ今れ
至ゝ卯月上卯日の例をおゝまゝ四の神殿れ宮造ゝ皇后ゝ韓ゝ御退治の時
當社ゝ軍神をれゝ宮造の体諸社ゝ混ぜゝ其ゝ滿ゝゐ二社をむゝ奥雄の
後ゝ一社ひゝくゝ鶴翼の圍を成ゝ所謂八陣の法をれゝ住吉造ゝゝ四のゝ号
四方ゐ立瑞籬ゐ四維ゐ圍ゝ攝社末社ゝ千餘所巍然ゝゝく連ゝゝ神人ゝ百
姓家軒を双ゝく整ゝゝう給人ゝ陪膳ゝ燦ゝ間断ゐく巻の煙松蒼ゝやゝゝく
君子の操ゝ象ゝ神樂の音ゝの声神馬の嘶穏ゐゝゝく四海の波風穏ゐ國家
ゝ謐ゝ社稷ゝ輔け玄の日陰ゝゝゐ和光ゝ滿の月ゐく照ゝゝ四海同慶乃

雖ゐ隨縁利物の若鎮ゐ薫次拝當社の
ゐう伊弉諾尊の心化ゝう參ゝく大直日神直日八十柱津日ゝゝ二神ゝ日遣ゝ
天の大日ゝの則天照ゐ神ゐう又底津ゝ童中津ゝ表津ゝ事ゝ表ゝ二神ゝ
月讀尊ゐゝゝく則攝居の塩土老翁豊玉彦稚日女の尊ゝ又底筒男中筒男
表筒男ゝゝ神ゝ金氣造化の神ゐゝ素盞烏尊ゐ五男ゝ一神ゝ二神ゝ三神
九神九神一神と申次ゝ一神ゝ則伊弉諾尊の心化ゝ則右の九神
ゐう神代の事れ九神とゝゝゝ事ゝ当座ゝ神傳ゐゝとゝゝ神人
秘ゝゝ沙ゝゝく語ゝゝれゝ和ゐ事ゝゝ

新古貿 住吉の淡れ真砂ゝゐむ鶴ゐ久ゝゝ

新拾 ひゝよゝゐゐ神の宮居の成ゆゝん古ゝく久ゝゝ住ようゝの松
後撰 後三条院の事住吉小社ゐあゐゐ日ゝゝ天ゝでゐゐ千ゝう社 伊勢
ゝゐゝゝゐゐ御ゐれゝゝゐゝ社のゐゐゝを待とゝゝまふ 大宰權帥 伊房
新古 奉幣使をゝひゝ寂ゝ荒ゐゝゐゝ住吉ゝゐひゝ社の 津守有基
住吉の淡れ真砂ゝゐむ鶴ゐ久ゝゝ 若宗通光

新後撰 神よ神をぬく住吉と名乗りおかる宮柱哉　太上天皇

○住吉大神を和哥の神と稱じ奉る事代々の帝鑒戒あめづらかれり

其例かずかず侍る詔して幣使の立せらるる事累世也惠しせらるる次　真圖云住吉の神を和哥
神と称じ奉る事上古より聞（傳云百年已来の事也古意にまかしく歟諸古意にまかしく歟）
伊勢諏訪の二尊の心化ふ現ずる事ども御神託
新古 我道ぬ陸りしは君をもるるんとそひの明と住吉社
新後撰 末の世の浦れ道とは捨ぬ神もれ哉をかけよ住吉社　住成
新後古 なのみをとそばそとそ道を頼かてまり社み吉乃祢　等特従流鏑太政大臣

○當社を海宮とも事神代の事也塩竈明神教て曰海神の宮に至らば其宮の雅埜整頓臺宇玲瓏ふ若し一の美人あらば豊玉姫之則大海神の豊玉姫の尊と其樹下にたたずみ給ふ一の井あり井上ふ桂木あり尊其樹下にたたずみ給ふ一の美人あらば豊玉姫之則大海神の豊玉姫の尊と其樹下にたたずみ給ふ一の井あり井上ふ桂木あり

老翁と其側ふ老翁を出見尊塩土老翁豊玉姫一扉の社あり桂樹の密社の神ふ称ふ塩土老翁に教ふ出見尊ふ就く海中ふ入ふ老翁と其側ふ老翁を出見尊塩土老翁豊玉姫一扉の社あり桂樹の密社の神ふ称ふ塩土老翁に教ふ出見尊ふ就く海中ふ入ふ

神ふ称ふ塩土老翁に教ふ出見尊ふ就く海中ふ入ふ再変ふして老翁を出見尊ふ就く海中ふ入ふ再変ふして老翁を出見尊ふ就く海中ふ入ふ

ふ其時いまだ住吉の神名あらず次ふ豊出嶋龍宮の神井ふ海宮の門前の井ふ其時いまだ住吉の神名あらず次ふ豊出嶋龍宮の神井ふ海宮の門前の

井を表とく人皇卅代、崇神天皇御宇始て海流ふ除し

住吉明神の下ふ五百里霜を降し給ふ　氣長足姫尊
神功皇后　新古 我道ぬ陸りしは君をもるるんとそひの明と住吉社の

神ふ称ふ塩土老翁に教ふ出見尊ふ就く海中ふ入ふ再変ふして老翁を出見尊ふ就く海中ふ入ふ再変ふして老翁を出見尊ふ就く海中ふ入ふ

神ふ称ふ塩土老翁に教ふ出見尊ふ就く海中ふ入ふ再変ふして老翁を出見尊ふ就く海中ふ入ふ再変ふして老翁を出見尊ふ就く海中ふ入ふ

船の守神と称ふ事ふ神功皇后の紀ふ二神誨て曰ふ吾和魂ふ天津淳中倉

の長峡ふ居て便往来船を看ふ於是神の教の隨鎮坐ふ平ふ海ふ

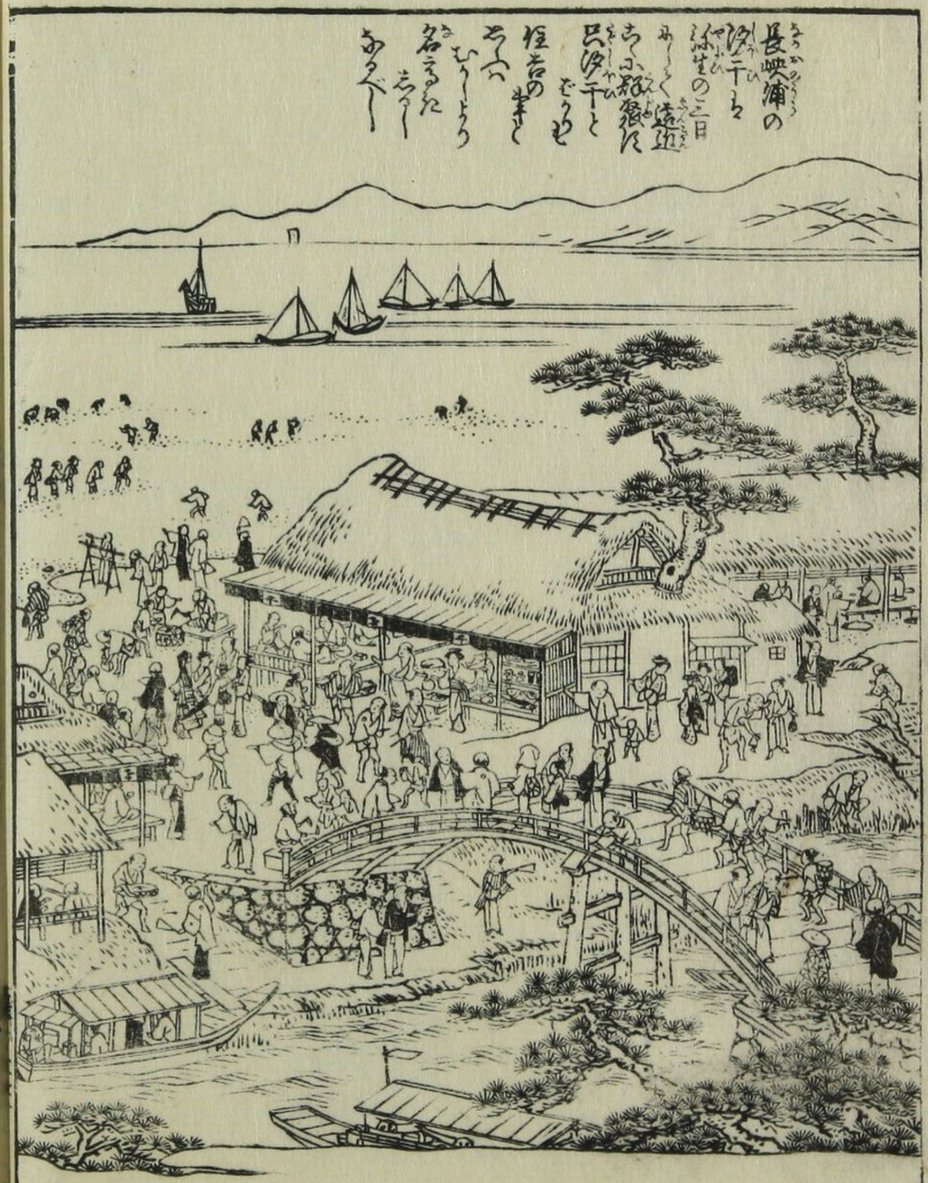
渉る事を得たる事都て三百十七年ふ厥后　氣長足姫尊
日本紀　故ふ船路ふ守ふる事を司ふ人船住
の貢ふ船長揖取まで也ふ祷ふ祭ふ風波の難を避波海穏

ふ祷ふ祭ふ風波の難を避波海穏



いくども行ようの浦々を經て綱の引ほどく海士の呼聲ふ
綱引くく諸人を神供くれいひ津國風土記ふ住吉大神現ほ
津國風土記ふ住吉大神現ほ天下をめぐり住吉ふ國を覓ふた
沼名椋長峽の荒ふ到りあれ ほ眞住吉ふ國ふくく讃めて眞住吉と
称へ社を定むるの俗ありほ行ほ異ふくく只須義乃叡くふを云住吉
勅文ふ住吉と歸る事ふ眞證鏡ようほくく天下をめぐり住吉ふ國を覓ふた
白銅鏡ふ神代ほ伊弉諾尊ほ天日霊尊ふ譲ほ右の御ほ向銅鏡をねほ
白銅鏡を持ほの則化出る神ほ月弓尊ふ譲ほ右の御ほ向銅鏡をねほ
則化出る神ほ月弓尊ふ譲ほ則化出る神ほ素盞
嗚尊ふ譲ほ云ふほ眞住吉の水ふ日の光清く潔ほ水碧る
住吉ふ事ふ住吉ふ事ふ記ふ古人の歌ふく筆澤及び古事記ふ異伝あ〜近代の
ある人よりえふ相通ふくふの日和えの事ふ延喜已後の事ふ
万葉 馬のはなゆえやそくやよ住の江ふ岸ふ生ふ松ほ豊継

長崎浦の
汐干ゟ
稲佐の二日
すゝき狩狼火
只汐干とでゝも
往古のまゝ
そこへ
むしやうろう
名ゑたろう
あつべし





まち柳の
ほとゝぎす
汐干ゟ
ゑゑ

ゟるのゝ
浦の月
かすみ
ゑもさそふ
夜ゝ

○玉出嶋 住吉社頭ふかう奇嵯名水ありし所と
つたふれど一區の平安の陸竈の阿跡雞鳴も海ふかく山川かとのわたれる地なれば
新拾遺
若たら玉出の岩ねわたらでやむうのをとをきくの世もくるしき 祥守圖ま

○住吉の神本の中ゐ松を第一と賞ぞる事ハ人皇十代 崇神天皇の御時三柱の
大神高天原より天降ませし墨江浦ゐ影向の砌二本の松忽然として一夜ゐ生ひ
あれ郭大神影向の瑞本ゐて永く住吉ゐ鎮座ゐ始ぬ先表之其時 天皇
使を墨江ゐ遣して其靈瑞をたゞせしめ給ゐ是より其松ゐ本綿紙掛
注連縄と引事ハ仏縁之今ゐ所謂影向石ゐまれ其地とぞ住吉勘文云 住江
松林下久送風痛とくまれゐ自爾已来或ハ和哥ゐ詠じ或ハ詩に賦し
住江の松を賞嘆せぬとハ事かし
松もあひと云の葉ふおぼ沙と書ハれ又万葉ゐも
清江乃本笑松原遠神 我王之幸行處

○長寿ハ仏家の尊ぶ所ゐ松樹ハ本朝の其次の中ゐ殿脇あり 狀龍のやう 駢て
飛節之ごとく或ハ茯苓龍骨仏生じ千歳ゐ及ぬれハ菅家の愛樹紀納言の辞ゐ
古ふるき松をのびそく問くまじ 右大臣
住吉の松も若咲ゐ代ゐ及ぬれハ 猿侯廼乃遊
若き代の久しきためしゐもひかれて十ゐ千ゐ万ゐ年ゐ住吉の松 はる氏人
あた生そくむこけ浦ふりつゐ波ゐ洗ハせぬ波ゐふりかゝる 從三位行尹
○住吉の忘艸とハ古今の傳授ありて容易人のもらべ見ぬふしぎ歌道の
家ふりそく明くむべし 近年の書ゐ俗説を双べまるて 従二位頼政
古今
道ある住吉ゐ社ゐそなもゆうむ住のえけ岸ゐおひて玉出ゐ岩ねわたらでやむ 法橋正広

住よしとあり今若宮通の人志茂生と書り　忠岑

續後拾遺　春日詣侍ける女に

春日山榊葉ゆふかけて住吉の岸の姫松いく代へぬらん　平棟仲

紀のよしさだ住吉の浦ふりくに春日に詣侍けるに美女ふたり出來て和歌よみ侍けるに

淀川の月ゆたかなるふかの女来て歌あり

住よしの濱もとゞろにもゆるかな

○忘貝　住吉の海濱の名産あり

万葉ふ之新勅撰

いとゞなほ〳〵忘貝ひろひおきて住吉の岸よりむかふ人ぞまたるゝ

墨の江のうしといふ乃ふきのつゝ見しかひなき忘れ貝かな　後人

○忘水　淺沢小野の細江の流をいふ名已上志州志摩郡

古今集住吉の二首忘れといふ

住よしの淺沢小野の忘水ゆくすゑとほくたのめてしかな　風雅

人もみな結ぶ氷もとけぬれば忘水我のみぞあふれける　後拾遺

夏虫の鳴ねは澤の忘水見ひ出ても人ぞ恋しき　頼政

○白鷺　社記云當社の神使と云真名鶴稲穂を皇大神宮へ献るの故なり

承和中源平駿擾の時當社大神白鷺に乗じ朝敵を退治しものがりと

橋樹　當社の祕木なり本殿北の側小橋ある社傳云神功皇后新羅を征し給ひ我日本へ渡り給ひし時此の澤の岡に八十艘の貢物を奉献次其中に

橘をとりて食ひ給ひしより此樹ありといはよりおふ橘なり

便冝水　社頭のみぞ〳〵〳〵に有り

寛慶二年十月住吉社より合社頭月次

月かげのさえぬかけ〳〵か神垣やよるの水もはらくおるまで　後拾遺

往合社　住吉社頭の社をいふ末社名寄

風吹ふかぬ小蔦やこゆるらん葛少枝の往合の杜　中務

往合橋　拾芥抄に詳なり俗説云住吉海道新家の北なる橋の下の流なり

楠大樹　延文元年四月十二日午の刻住吉の神床大樹の楠風吹ざるに中より折倒れ南朝の密奏次諸卿不吉の叡慮ありと云々

知利也多羅里　一之社より巽方を町許ふ小流あり其中に龍のみそ萠出

髄橋　社頭石華表の東北石橋ありて土佐の国久礼田村の石を以て造之

駒止石　社頭の四方ふあり

長峡橋　西の方牛馬場前

長峡浦ふあり

住吉御田祭式

其一



北斎画

田楽法師舞踏曲



五月廿八日御田祭
神武ハ安うらうら
作って天下の繁昌を
祈ひもうぜんと
祝へとぞ

其二

植女の図式








神功皇后三韓征伐の体を表し

○齋神攝社末社遠近ニ多ク次第ニ標記ヲ

○若宮八幡宮　一ノ神殿ノ南ニ西向ノ社ニ座ス并ニ應神天皇相殿武内宿禰神哀帝神勅ヲ承シ給ヒ新羅國ヲ征シ給ヒシ時ニ皇后ト共ニ御船ノ舳ニ立チ給ヒ八幡ノ神勅ヲ授ケ給ヒシ後ニ歸朝ノ後ニ筑紫ノ國ニ行宮ヲ構ヘ給ヒシ時ニ此ノ神勅ヲ以テ異國降伏ノ御祈禱ヲ行ヒ給ヒシ故ニ此ノ地ニ勧請シ奉ル神功皇后ノ胎中天皇ヲ攝政ノ間ニ宿禰ト共ニ新羅國ヲ征シ給ヒシ時ニ此ノ神勅ヲ以テ異國降伏ノ御祈禱ヲ行ヒ給ヒシ故ニ此ノ地ニ勧請シ奉ル神功皇后ノ胎中天皇ヲ攝政ノ間ニ宿禰ト共ニ新羅國ヲ征シ給ヒシ時ニ此ノ神勅ヲ以テ異國降伏ノ御祈禱ヲ行ヒ給ヒシ故ニ此ノ地ニ勧請シ奉ル

○鉾御前神社　二ノ神殿ノ北ニ向ヒ并ニ四ノ神殿ノ北ニ向ヒ并ニ四座ノ内ニ延喜式ニ春日明神四座ノ内ニ相殿ニ座ス

の東小祠を神宮寺の鎮守と祭る法要を勤む例条八月九日住吉里及び
○國助祠 祢宮寺の内鐘楼坊の西にあり故ふあくに其垂社を建給ふ主祠と
毎年二月九日社祭を行ふ 今いまだ楽ぐらを奏せず
○國基祠 淨土寺の中にあり國基神主垂と称す
居墨ふかく玉乗のまぐちして屋あたつくる夕闇の空 ほう國基
○大歳神社 本殿南を向許ふあり向の社と延喜式の第津大歳神社と称是之
あく金銀通用の契約の不変を大歳の子孫五穀神と迫年限華の
の秘文 大歳神と称す 祭恭に幸と得る事疑わしく
○龍王神祠 大領邑の東ふあり条祢
○星宮 坂之井邑ふあり条神 青龍北龍の二神と
大白星磐根裂の二星と
○新宮 は守寺の門外松林の中ふあり条祢
伊弉諾尊 伊弉册尊
○若村神社 沢村の東ふ所許ふあり東向の社と条祢素盞烏尊稲田姫之
延喜式曰止狩倍支比賣神社と称す倍支比
轟橋あり 鳶記曰第久之二月に日若松下前と造進
社説云 後鳥羽院熊野御幸の時住吉其路径あれを津国
椋中ふ御所を造り御宮と則海性しまる今
仏社を村民の生土神と敬松系とす条祢三座奥津彦命
○辣財天祠 昔は澤沼の中ふあり弁才天と称ぐ
竹林の中ふ葡萄次
○荒神祠 安立町ふあり社地を敷 祢て歩王社と称ぐ
奥津彦命 土御祖神
○山坂神祠 住吉より東北十町許ふあり条祢
○三十歩神祠 平野郷中野堂町ふあり延喜式曰赤留比賣命神社
条祢 玉依姫命
五葉 速玉男
楡の大ホあり
○大依羅神社 延喜式曰大依羅神社四座大月次相嘗新嘗
条祢 大巳貴命 月次見尊 奇仁天皇 五十狭茅宿禰
日本紀曰 神功皇后九年 昂得神教而拝禮之因以依羅吾男鬼
為祭神主 三 續日本後紀曰承和十四年七月修理 梅津國大依羅社 三
三代實録曰奉授大依羅神従五位下勲八等 同巻曰元慶二年六月十四日
癸酉遣使於摂津國住吉大依羅等神社奉神賦 云 今年年村の土民
例年八月十八日神事を勤む
依羅杜 仏宮居の杜と 依羅原
拾遺愚抄 神籬のめぐりの野ふ
万葉 若き代ゆくさむの杜もとをちなる松と松とを千たをちへむ 定家
あふさはらよさむの原乃人もそるかもいはふ浜海の 人丸

六月十四日住吉浦の
潮水ふ身を浸せば
百病ふ治をるやふく
近世遠近那衆を
ざれと泥湯とふて
潮ふ湯みふく
浴をれを下焦の
疼痛ふ
治をる事を
醫學六要ふも
ふてふう





依網池　羅を又網とも書次依羅原ふあり日本紀曰　崇神天皇六十二年詔曰農天下之大本也民所特以生也中略其令開池溝以寛民業冬十月造依網池同紀云　推古天皇十五年作二依網池一云々　後世云二依網池一訛れる也　今　音ふ依網と称ぐ　多分誤れる味右街門池とぴ又灘く　依羅井　神名ふあり　澤潦ふ井也と　の附会井を呼んで井社と　依網里　今を井村と　いふあり

神名にも見えたる名をいふもせんよしもがな　仲實

をちこちふみ見れど昔しのきくにはよさむの里ぞあはれ依羅の里ぞ哀なる

きくたふ嵐ぞ吹そふ秋そや依羅の里の夕暮の空　式賢門院御歌

○三村明神社　楊甲堅町　○九艘明神社　清寺北町旭蓮社の境内ふあり　○宿院　楊宿院町ふあり　住吉御旅所也　○舳松社　日前ふあり　○甲祠　日前ふあり　○八祖神祠　宿院の山ふあり　○方違神祠　楊の東多出井山ふあり　住吉神初て鎮座有之村社より已下住吉の摂社勿論楊津大ふ浴ひ出次名依高須あるひ七堂ゲ浜より南ふ同史ふ和泉國住吉郡ふとも墓ふ和名名所圖會ふ其社傳を著ス

○菅原合尊社　住吉勘文云御鎮坐所神ふ有之ゑゑ　○火闌降命神祠　勘文云社地未考　○龍神山神跡　祠ふ立予楊の側ふ沼田龍楊の名あり　○御沓石　神舘西の側ふあり形とそ名とれ社説曰むかし　神功皇后新羅を征しゆるん時ふ御沓ふ脱落ちしふ依て

畫の如し　側を顧れば　大石あり　本多摩郡と勝て稱をひろふ　住吉大神を祈るに易く　其の應護を加へ給へること　感應神妙なり　年多き松古木森々として　大神の經を解く男子あり　誕生あり　是則大神の應護を加へ給へること　感應神妙なり　年多き松古木森々として　大神の經を解く男子あり　誕生あり　是則大神

○津守家舘　本社の巽にあり　手搓足尼　仕神功皇后　伊勢国を賜ふ　同二年大忠之と　驛に　そんそう　紫石ふ　瑞籬　後太平記ふし　仕事

日本紀　田嘗見宿禰　攝津志曰　津守宿禰　鹿嶋郡之　津守國禮　朝臣すそ　當時社務　功名の人物多し　猶其傳をもとめて　都く　七十三代之　歴代の名家みてく

津守國基　源平　年中の人　住吉神司ふ補して　従九位下ふ叙を博識　宏才ふ　其上像歌を善し　筆を弾じ

紀氏系譜の中ふ住吉の松のをひとりみるふ　津守國基

津守有基　津守景基　倶ふ國基の子

若くして　文部の大系統二百餘巻を　看法中を　悟りて　悉く　宿を成達して　朴明の法樂をなし　公會ふ　在職して　後法して

津守國平　住國の

和哥ふ　妙ふ

○松榮亭　社務住吉家ふあり　千葉氏　祝して　社頭ふあり　田を村の神役の者　毎朝　拜を毎夕　拜ふ　是則大神の應護を加へ給へること　感應神妙なり

○神馬舍　社務住吉家ふあり　千葉氏　祝して　社頭ふあり　田を村の神役の者　毎朝　拜を毎夕　拜ふ　是則大神の應護を加へ給へること　感應神妙なり

○田嘗見宿禰七姓之祖神　侍者　賜して　住吉の氏人となり　是祖氏及び　津氏の祖祢　毎年四月申日　神床之所　十一月申日氏祢祭あり　御會所なり　後者祠院　當社子　別祭　のゆ　和哥を讀せらるゝ　今ふ至るまで　此例ふ於て　あり　祠なり　一ノ墨江山の上ふ　あり　祠なり　一ノ同例の内ふ　高市氏の祖祢　一ノ墨江山の上ふ

○後村上帝行宮　延元七年　定實　公年二月　足利義詮　伴く　南朝　住吉　将軍家　國初の　仕例入　仕し　事

津守國助　國平の子　文和　年中の人　津守國宣平　津守棟國　倶ふ國助の子　津守國冬　國助の子

弘安年中の人　秀歌　多し　攬集ふ出ル　津守國道　國冬の子　津守國藤　棟國の子　津守國夏　國助の子

國夏の子　應永年中の人　倶ふ　津守國久　倶ふ國夏の孫　津守國顯　國助の子

倶ふ和哥を　能く　多く　傳ル　津守國益　國顯の子　文子　倶ふ和哥を　能く　和琴を　弾じ　津守氏女　國助の女　和哥を　能く　和琴を　弾じ　父兄と　譽を　共ふ

社務住吉家の　錦袋の　宮く次

津氏の祖神　寶殿二所　一ハ大領村ふのり是大領氏の祖神　一ハ道北邑と法華北を町許所中ふのり是大宅氏の祖神　一ハ道北邑と法華北を町許所中ふのり祠を

○神宮寺　本社の北ふあり舊号勅羅寺　天台宗東敵山ふ属　次天平二年孝嫌天皇住吉大神の霊告ふよりて建営しまふ　尚額日光

本尊藥師佛　日光仰四大天王十二神将等定朝の作

西常行三昧堂　阿弥陀観音勢至　東之昧堂　釋迦文殊普賢の三尊ふ安置次

二層塔　東西ふ両塔あり　金剛界胎蔵界大日如来四天王を安置次第ふ

寶塔の画後ふ移す　両扉十二天其外佛殿極彩色　特ふ山樂筆

法華會舞樂　石舞臺　今主祠の基　今主祠　傍坊のあふのり國助主を

永閑持堂　本尊虚空蔵菩薩ふおふまふ四天王　五大力菩薩像　寶蔵天王ふ安置次

立幅俗傳云住吉大神ふ化筆ふ成ふ山樂の筆

画ふよりて其外輪蔵俗室あり　什寶○五色佛舎利○五部大乘經

壹圓紙金泥ふて書ふ竹とく編ふ悦ふ　向ふの女院の御願ふて津守領園の寄附ふ成ふ　○大般若經　細書六十巻全部六百巻

光明皇后　○法華經　細書八巻

御筆

其外数品あり

○元亨釋書云養老七年十一月廿一日勅明達於住吉神宮寺伏誕友云云

○津守寺　神宮寺の號ふのり聊寺ふもいふ延喜元年の建立ふ住吉社と共ふ造営ふのり出現

本尊藥師佛　津守浦脇士不動毘沙門　講堂　神宮寺の東ふのり真言宗　白河院御宇應徳元年津守園基の内ふ移す

○朝日山莊嚴淨土寺　神宮寺の号ふ改ふ　中比ハ文應元年定朝の作左弘法大師の作

興正菩薩重興せり　本尊不動明王　弘法大師の作　多聞天　右興正菩薩

告磯石　傳曰園基造立の時紀州和歌浦より磯石を運送ふれそ園基の内ふ上る

一説ふ紀州王津当神ふ上る

年ゆきて老も世ぶりそれおふ法浦の貴代ふのりぬ也法当寺ふ　園基

教年ふ天女出現海上風波穏ふのり巨石の内ふ

媛ろとも是和歌感應の験ふや原当山ふ古寺ふ

朱雀帝の御字天慶三年将門純友謀叛の時当寺のそ儀ふ

依て其功を賞ふ其後園基再興ありしふ

地と開くの時二尺有餘の金仏を掘出ふ其銘ふ

七寶荘嚴極樂淨土ふ表し境内方八町

勅願所とあふ其後十三年ふ及ふ

元年二月勅使廷尉都幸の園基ふ

護師西塔宗心阿闍梨権大僧都

荘嚴焔魔堂　堀川院御宇永長

圖墨の再建供者の解状ふ

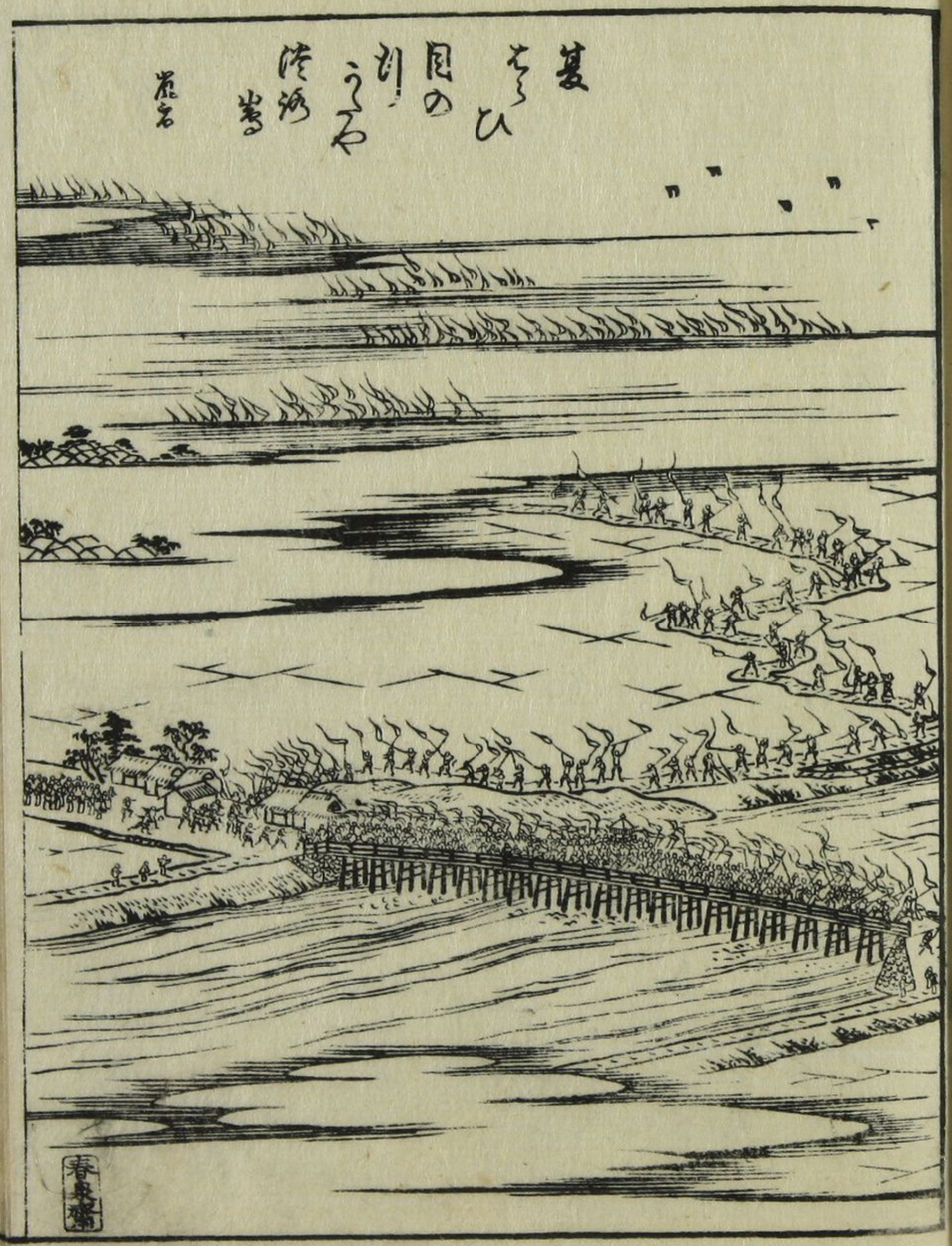
厨官道式賢卿講師模作

今の神宮寺と一双の絵図ふ

鉢洗石　高さ壱尺

勝大和橋
恒吉大稜神社
還幸





○住吉神社有二箇年七十五箇度祭祀粗撰大祭記焉

○正月

元旦 若水 二日 天長地久御祈禱 歌合 三日 奉幣 四日 踏歌

七日 人日 八日 神宮寺加持香水 九日 結鎮 弓箭の大禮之 神功皇后三韓退治 廿六日 連哥

十三日 御結鎮

○二月上旬

祈年穀祭 五穀豊熟の祈禱をなす 神主權神主 神館に於て 大神祇公事根源曰 是れ太神宮以下三千一百卅二座乃神をはじめ諸國ゆも年ごとの幣帛を奉るおのおの幣帛をもちて其神祇官に參集ひ周禮に祈年の禮を載せたるごとく祈祇官にて祈年祭をとり行ふ 白赭白綾 是れ古の遺風なり

天武天皇四年二月ふたたび新嘗祭ありて四ケの祭ごとく國の大幸とをるべし

○三月上旬

埴使 祈年祭又十一日 新嘗祭 衣を着し 大香山を去る事半里許 火山口神社 神功皇后埴使さくふ 路次一日ゆく 彼の祭到る 於て 發束を改め 香山の社司と共ふ榛を俛しめのふに入ッく 頃と云ふ其時には賢木 筆ふ身と 古ふ其土ふ云ふ 所定もつ ゆくふ神井 水極く 是井代乃 天の真名井 也 多く 賢木 埴使 手に三纏半 也 竪日住吉ふ服 天平寶と 二日朔日ふ住吉祭 日ふ澤ふ 祈年 祭 十一日

出ゆく廿日住吉ふ服る両度 供の祭器 拵頭を取 盥漱を奉 とをゆく 八十平瓮を 迹下を 瀧さをの その土ふ 香久 むゆくふ 香久 云ふ大和名所圖會ふあるそ

○三月三日

曲水 平瓮造 五日 御殿開 六日 御唐鍬 九日 二月會定

○三月三日

闘鶏 八日 大祭會 二月會ふも三四十六代の神主津守經國自書 の大數往供書ふゆく 九日 神宮寺今主祠法華會

○四月

卯日神事 上卯日ゆ 神功皇后十一年辛卯大祢宜社ふ 籠坐の日 廿日ふ 元服の住義を 神人 賢木を持ゆく 祢宜を警蹕次津守家

洞ノ廣ふ出仕次

○音無馬

競馬 廿八日 御田植神事 神田ふ苗と殖るの祭式 廿日社務家連 と着ゆく 遊戯 基法式 しゆく徑営あり 又祢宮寺の社僧甲冑 人又 惣ノ作 乳守 ふ 神事 況ふ一千有餘 業ふ 遠く 遊人 褊廂の 也 日 遠近 諸人 集て 觀ふ 又泉州大津より 田楽人 昔ふ 向ゆく 御田を植ふ 俳あり 素ゆく 田楽のそのめい 翁野 群 載ふ 詳 也 神事況ふ云 住吉 御田ふ 泉州 堺津 乳なり 遊女 いろん方る 俳 紀事ニ云 住吉 御田ふ 泉州 堺津 乳なり 遊女 立人 早乙女 とある事 信用し難し 祢宜 祇園會 神輿洗 ふも 祇園町 れ 遊女 の出る事 所祇園會 神輿洗 ふも 祇園町 れ 遊女 女錦 繍を 飾 着ゆく 播州室 祭 ふも 室津乃 遊女 遠者ふ出 播州室津乃 遊女

神輿の供奉そろ御あり敢て古の事なし紀ふ所なり
御田は古た画るも見くるを偖しあるを猶ふ若葉の生育のよろ平に
の出立みく神輿開口ふ神事次第にしん慶面し古代の風俗
○六月晦日 大祓 六月ふみの日の朝廿九日次用ひ大祓の宣ひ次第に
毎年神輿一基社家ふ出し〳〵く神人社僧祝詞次後し〳〵く神人社僧祝詞次後し〳〵く神
社司あく騎馬つく供奉六七案詳素絹を着し茶磨袴次脱ふ場の御旅所ふ到る初ノ社僧
場ふ到る七堂伽藍御旅通大ふ洛ふ神輿の幸次待て院ふ
く又神を着院の假宮ふ迎し又祝詞次奉ふ入まる神輿
住吉ふ還幸其時場の旅人船長漢師の疑ふ毎ふ怪き点し
神輿を執大和橋ふ送る救石人の怪恰白昼の出現
あり次西ノ宮御旅通り産所
岡田ふ火を的〳〵く神輿を奉ると〳〵く供奉飛
大坂の北人市造桃灯ふ
の案内の桃灯を照らし
を造ひ〳〵く御旅所ふ着し〳〵く神輿一基社家ふ出し〳〵く神
て名残御旅ふ荒和祓と
ふ出ひく旅とひ〳〵せ申
公事根源曰大ふ〳〵く
祓ふ〳〵六月十二日二ど
觸稼かるの時も有神事
祓ら而宮一日ふ
祓ふ〳〵

○七月七日 虫干 一ノ神殿ふ社務出く神輿ふ
○八月朔日 瓦摘 續紀所ふ曰く虫干あり
十五日 蓮哥 廿日 九月會定
○九月十三日 相撲會 又寶亀元年ふ始次拾芥抄曰九月十三日相撲會云云社説云
神主勅使代ふ〳〵く神輿を王出嶌帳宮へ渡し〳〵く供奉々供あり
注連を纏て〳〵く合次是昂三韓退治の体ふ表次又財宝ふ
三韓ふ献らく社ふ〳〵く原泉州堺一津ふ〳〵く
品貨物を交易ふ升を多く勢ふ〳〵く社頭ふ升を多く勢ふ〳〵く

ふ月れかごーのつくそる人いちと多のい即ちのくつくつ
ふ歌をそつくつくそつくつくあり 後人ふ
法拾遺 和泉式部

思ふ事ふれつくつくとそあさ社業をきうふ給うそもつくつふ

切麻ノ事之江次第云神祇官領切麻
ふ〳〵く祓そそ〳〵く〳〵く祓ふ四時祓ふ〳〵く相撲
世諺向各曰云〳〵く秋の祓〳〵く金生水ふ春の木ふ水生木ふ春の木ふ
の火ふ木生火ふ夏の火ふ秋の金ふ火剋金ふ〳〵く相生ふ夏
秋ふ夏祓のさうひふ〳〵く天地相和せざる時ふ暴風洪水おこりく五穀不熟疫病死傷
ふ〳〵く人民病死傷あり其厄氣ふ和祓之
ふ〳〵く祓川夏神樂夏祓等みふ〳〵く祓をいふ〳〵く
ふ事日本紀先代旧事紀神祇令延喜式清涼御記等ふ詳あり
○七月七日 虫干 一ノ神殿ふ社務出く神輿ふ
○八月朔日 瓦摘 續紀所ふ曰く虫干あり
十五日 蓮哥 廿日 九月會定
○九月十三日 相撲會 又寶亀元年ふ始次拾芥抄曰九月十三日相撲會云云社説云
神主勅使代ふ〳〵く神輿を王出嶌帳宮へ渡し〳〵く供奉々供あり
注連を纏て〳〵く合次是昂三韓退治の体ふ表次又財宝ふ
三韓ふ献らく社ふ〳〵く原泉州堺一津ふ〳〵く
品貨物を交易ふ升を多く勢ふ〳〵く社頭ふ升を多く勢ふ〳〵く

を入内器仗取納とて
これも同じく賀宴ど

升冥くら別くら月見の事

○十月廿日 同月晦日 玉出峯の御祓 北条ともし騨に蔵云当社も出雲の大社ふ准ふ
故ふ神送といてく社説云こゝ甚非之ど也く天下の
諸社出雲の大社ふ倣ふ祓を修もるべし説其論ね今決せど玉出嶋ふ当社社
秘匿ひ祈ふ詫く祓を修もるべし説其論ね今決せど玉出嶋ふ当社社

○十月廿日 新嘗祭 あるく古くより今年新穀をとり
安泰国家幸福の大祭ど昔ハ当国の国司当社ふ招しく奉幣ありく天下の
神馬を献て繒を設け幣帛を
そなく平瓮ふ飯を盛て奉幣ありく天香久山の埴を
取しく奉幣の礼式儀ふ十カ三と存せり是公事根源ふ見へたり中世乱国の初歟
紀の伊国日の祢ふん大儀任吉穴師大神恩智惹冨萬木明
神堂系の幣ふ准ふくうけくうおこなへりと見へたり相嘗
祭ハ延喜式ふハ見へざれど
とも書くあひむくの条ともむべ

○十一月廿日 神宮寺仏名 晦日 煤掃 附簇 任吉例条之記ふ見へたり

○三月晦 任吉汐干 廿日ハ住吉浦の汐干ども遠近社頭ふ群集しく遠浦ふ出しく
遠く出しく真砂の路をふみ分しく沖の方へ沖へ
もあるく海藻ふ採ふ群集しく土人曰ふ此汐干ハ
上り帆の淡路をふまれ汐干ども見へたり

蜑ハ樓ふ之味ひくらほひうか

○六月十日 潮湯 廿日血世 石疝 諸人社頭ふ群集しく住吉浦乃潮水ふ
浴しく百病平癒を祈ふ霊験炳然しく土人曰ふ
汐稜の汁奥沈ともいふ久し説ふ云廿日ふ温泉
こゝ小浦ふ出るともいふ九十三日ふ到りく群集
車汲ふ千阿稜の中華
小舟ふ乗しく潮泉ふ到りく潮泉ふ漕寄しく潮水ふ汲しく
潮湯ハ又阿稜の湧湯ともいふ
故ふ萬病ふ効ありて時刻ふ准ふ
殊ふ身体疼痛虚寒厥冷の人ふ准ふ
器ふ盛ふ湯ふ入ふ
引とりく

雑篇 生皮

○六月十日 潮湯 廿日血世 石疝 諸人社頭ふ群集しく住吉浦乃潮水ふ
浴しく百病平癒を祈ふ霊験炳然しく土人曰ふ
汐稜の汁奥沈ともいふ久し説ふ云廿日ふ温泉
こゝ小浦ふ出るともいふ九十三日ふ到りく群集
車汲ふ千阿稜の中華
小舟ふ乗しく潮泉ふ到りく潮泉ふ漕寄しく潮水ふ汲しく
潮湯ハ又阿稜の湧湯ともいふ
故ふ萬病ふ効ありて時刻ふ准ふ
殊ふ身体疼痛虚寒厥冷の人ふ准ふ
器ふ盛ふ湯ふ入ふ
引とりく

住吉
小町茶屋

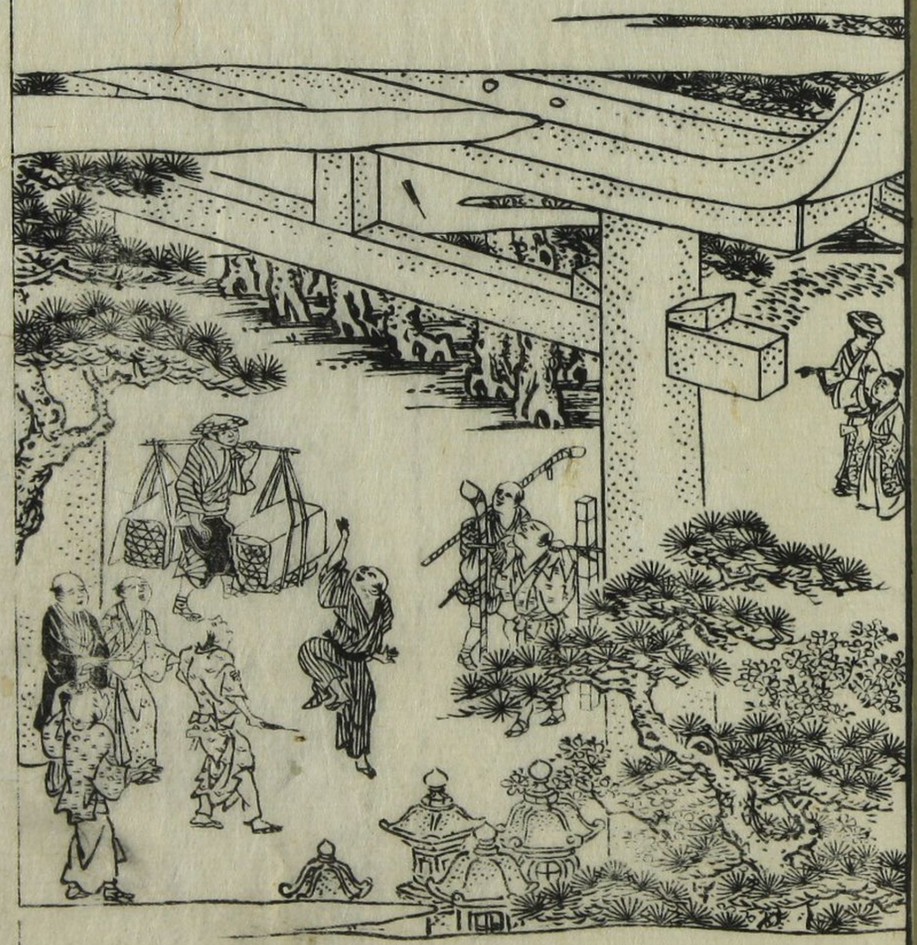
後吉
すみよしの
浜松のえの
絶まもり
千のうふこゆる
名のゆふしほて

後徳大寺
五大臣



松平侯
玉出の
岩もと
申久
大江丸

小町茶屋ふく
杜宇なくなる
菓の
四十九もみ
ちしてもと
みどり
柄のそろふ
杓
琴竹



墨之江（すみのえ）神社（じんじゃ）より一町許（ばかり）西（にし）なり 名所（めいしょ）百（ひゃく）図（ず）に成（なり）り

万葉

馬（うま）のあゆおそくとやひ旅（たび）の江（え）の岸（きし）の浜風（はまかぜ）吹（ふ）きはらひそゆん　豊鉾

古今

住の江（すみのえ）の江（え）に松（まつ）ほど久（ひさ）しき物（もの）はあらじの日（ひ）ごろ　業平朝臣

後拾遺

ながらふる我（わ）が身（み）をそも住の江（すみのえ）の岸（きし）打（う）つ波（なみ）のかひやなからん　国道

後千載九神

おりしも今（いま）神代（かみよ）もきかや天（あま）のそらひとつ月（つき）の住の江（すみのえ）の岸（きし）　後嵯峨

すみよしの御社（みやしろ）

住吉細江（すみよしのほそえ）　今（いま）の長山（ながやま）川流（かわながれ）をいふ（下流（しもつながれ）をそういふ）　龍楡（りゅうしょう）獨梁楡（どくりょうしょう）の詞（ことば）

千五百番

春（はる）ごとの細江（ほそえ）の澪標（みおつくし）ふるきあとまで年（とし）ぞへにける　相撲

住吉の細江のあしも春（はる）くれば若（わか）葉（ば）つみてふ名（な）にこそありけれ　頼昭

千首

住吉は細江（ほそえ）に生（お）ふるあし鶴（たづ）の立（たち）ゐも君（きみ）が千代（ちよ）のためしに　元仲

すみよしの浦（うら）　那（な）て当社（とうしゃ）の浦（うら）をいふ

住吉浦（すみよしのうら）に舟（ふね）さしよせて汐（しお）干（ひ）まつ間（ま）も恋（こい）しかるらん　後拾遺　恵慶

住吉の浦風（うらかぜ）さえて夜（よ）や更（ふ）けぬらん月（つき）に波（なみ）こす沖（おき）の白波（しらなみ）　一條右大臣

すみよしの浦（うら）の岸（きし）打（う）つ波（なみ）の声（こえ）高（たか）し我（わ）が住吉（すみよし）と神（かみ）や聞（き）くらん　新勅撰　藤原為家朝臣

住吉岸（すみよしのきし）　又岸（また）とも浜（はま）とも渚（なぎさ）とも松原（まつばら）ともいふ

万葉

住吉の岸（きし）に向（むか）ひて漕（こ）ぐ船（ふね）の風（かぜ）を疾（はや）みとかも波（なみ）の騒（さわ）ける　後撰　藤原興風

住吉の岸（きし）の松（まつ）風（かぜ）吹（ふ）くからに声（こえ）うちそふる沖（おき）つ白波（しらなみ）　拾遺　平兼盛

住吉の岸（きし）の松原（まつばら）遠（とお）ければ月（つき）をしまつの影（かげ）ぞ待（まち）つる　後人（ごにん）詠（よめる）

住吉の岸（きし）の松原（まつばら）波（なみ）わけて来（こ）ぬ人（ひと）までもなほ待（まち）つべきかな　定家

家集

住吉は人（ひと）の為（ため）とてもかからぬ岸（きし）の松（まつ）風（かぜ）ふけばこそ聞（きく）　定家

玉葉

夕（ゆう）ぐれは雲（くも）のはたてを住吉（すみよし）の岸（きし）の松風（まつかぜ）吹（ふ）きしきて　後人（ごにん）詠（よめる）

住吉岸田（すみよしのきしだ）　又演田（えんでん）小田（おだ）とも号（ごう）す　祇園（ぎおん）社（しゃ）供（ども）を舟（ふね）にて門田（かどた）へ渡（わた）る

万葉

住吉の岸（きし）と田（た）ふさう苅（かり）稲（いね）の老（おい）もかもあやにかなしき　人麿

風雅

松かげの水（みず）をたのみて住吉（すみよし）の岸（きし）の上田（うえだ）の苗（なえ）ぞ繁（しげ）れる　宗長

玉葉

住吉の岸田（きしだ）の若菜（わかな）ふたゝびの恩（おん）に立（たち）もそふる波（なみ）かな　為家

同

きそふ也（なり）沙汰（さた）のえ難（がた）き岸（きし）の田（た）の種苅（たねかり）ぬらし　公

住吉岡（すみよしのおか）

拾壱

住吉津　古湊の南にあり日本紀云雄略天皇十四年正月身狭村主青等共呉の國使將呉の所献手末才伎漢織呉織及衣縫兄媛弟媛等を筑紫の伊知の郡の伊知の津に泊す云々

住吉里　むかしは神領にて百姓家もまばらなりしと云々

万葉　住吉の里を浮しくそ思ふ君ある時と寝ねかてなくに

拾壱

宮古路ゆくに懐旧の情を催して詠める

墨江池　勅文曰墨江池の南は大年社芦原と字る沼田を墨江池といふ名

拾玉

六月雨のすさまじく降て日数を経れば海よりも池よりも白波

玉葉　あらき風吹そふ秋の夜の雨に萩の古枝や残るらん

同

それの秋住の江とのく池ふかさ

津守浦　をみなへしの浦ともいふ一名あり又載

神代よりつもりて浦ふかゝるらん

続古　あさこれいかもつもりの浦ならん

万葉　大船の津守が占にのらなくに

続古　君が代につもりの浦ふ大海の神もちらせと待ときけ

新続古　月影のさもつもりの浦風に秋をしぬ住よしの松

新勅　松が根こゆる秋風のうらさびしくもまがふ沖つ白波

長居江　住吉の東南の辺とも云ふ

隔川橋有望の長居の池ふかゝるらん

長居浦　社説云水原長居江ともいふ浦曲をいふ名歟沖吐濱編曰長居浦万葉ふかゝ後園ふかあり

千載　君さへくさ秋も長居の浦ならん

新後撰　嵐吹伊駒の山は雲晴てふもとの里に雪ぞ降ける

新千載　沖津波さもつもるとも君ふかゝる月の夜

同　君が代のみよ久しくとせきとめて色居のうへに苔ぞ生ける

堀川院　秋の萩おもふ丹の浦ふかゝる波のかゝるくそ袖ぬれける

千五百番　君が代を長井のうらふかゝる国寒も暑代ぞと色守沙く

常陸　大林寺ま

後鳥羽院　住吉法楽

左大臣　

後京極摂政前太政大臣　忠良

あこ紙吉　俊寺

若鎮　

万葉　大船の津守が占にのらなくに

続古　君が代につもりの浦ふ大海の神もちらせと待ときけ

新続古　月影のさもつもりの浦風に秋をしぬ住よしの松

新勅　松が根こゆる秋風のうらさびしくもまがふ沖つ白波

長居江　住吉の東南の辺とも云ふ

隔川橋有望の長居の池ふかゝるらん

長居浦　社説云水原長居江ともいふ浦曲をいふ名歟沖吐濱編曰長居浦万葉ふかゝ後園ふかあり

千載　君さへくさ秋も長居の浦ならん

新後撰　嵐吹伊駒の山は雲晴てふもとの里に雪ぞ降ける

新千載　沖津波さもつもるとも君ふかゝる月の夜

同　君が代のみよ久しくとせきとめて色居のうへに苔ぞ生ける

堀川院　秋の萩おもふ丹の浦ふかゝる波のかゝるくそ袖ぬれける

千五百番　君が代を長井のうらふかゝる国寒も暑代ぞと色守沙く

常陸　大林寺ま

後鳥羽院　住吉法楽

左大臣　

後京極摂政前太政大臣　忠良

あこ紙吉　俊寺

若鎮　



長井濱 上と同前

主本 君が代をかぞふねば濱のまさごさへ
旧 きさき代の名井の濱ぬれそふらん

旧 君が代にかかれば濱ぶいるさへ
名寄 ばば 新田ふあり

濱松岸 住吉岸の一名をいふ 又濱松堤といふ 多名家大

筆ふことふいくよまでをかぞへん清ちのうら丹濱松の岩 後成

出見ノ濱 社説云住吉松原の真砂松原の濱をいふあり 一名長峡浦といふ

万葉 住吉の岸の濱ぬれそぼちあかつきあらしふきぞまさる 人丸

名寄 菱ノ又岸の濱を住吉とまをすしき 内大臣

壬二 秋の夜の月の光も住吉の松走の船ぬ極とて 刻夜ふ方角先人は

高燈籠 出見濱ふあり 夜走の船ぬ極とて 刻夜ふ方角先人は

住吉大神を祭る仏前の灯燈ふ煌々と光輝くとそ

粉濱 或曰今の中在家村の海辺之 家隆

又粉洲とも称ス

万葉 住吉のこや田の堤めけもなき恋ひてのみや恋ひてうるむ 濱人

主本 住吉のあらゝの中ことふ川ぬくも見んかたれてのみや恋ひてうるん 定家

楠嵜 社記曰仏前右手ノ岸ヲ楠浦ト云ト云ヘリ

名寄 ふ仏あり

うら波ふきもてる塩のてりかへし楠ふ嵜とそ言ふ葉ぞ有ける 慶玄

浅澤 本殿より弐丁許巽ふあり 燕子花の名所ふ今田圃とあり

千載 五月雨ふ浅沢沼のねろふこもりてれりか 藤原教神官

彩千 春ふよりの浅沢水ふ新れなき月も葉ふてれば 津守國助

沙沢小野 今の大歳神社細江の南の方東の田圃をいふ

後千 下萌や先いそく焼白雪の沙沢をのふつふか掻々う 若家

風雅 いそのふらにうか掻てん根せうまる沙澤小菅ふ里をこそ 俊成

龍橋 浅沢沼の東南ふあり 獨梁橋 浅沢の西ふあう下流を細江川とふ

惹恩寺 住吉社より東ふあう天台宗松野山地蔵寺と号仏

聖徳太子の御作うう本尊十一面観世音ふ

後醍醐帝当社ふ御幸ふ

車返櫻 再び車をかへしゝゆへとふ

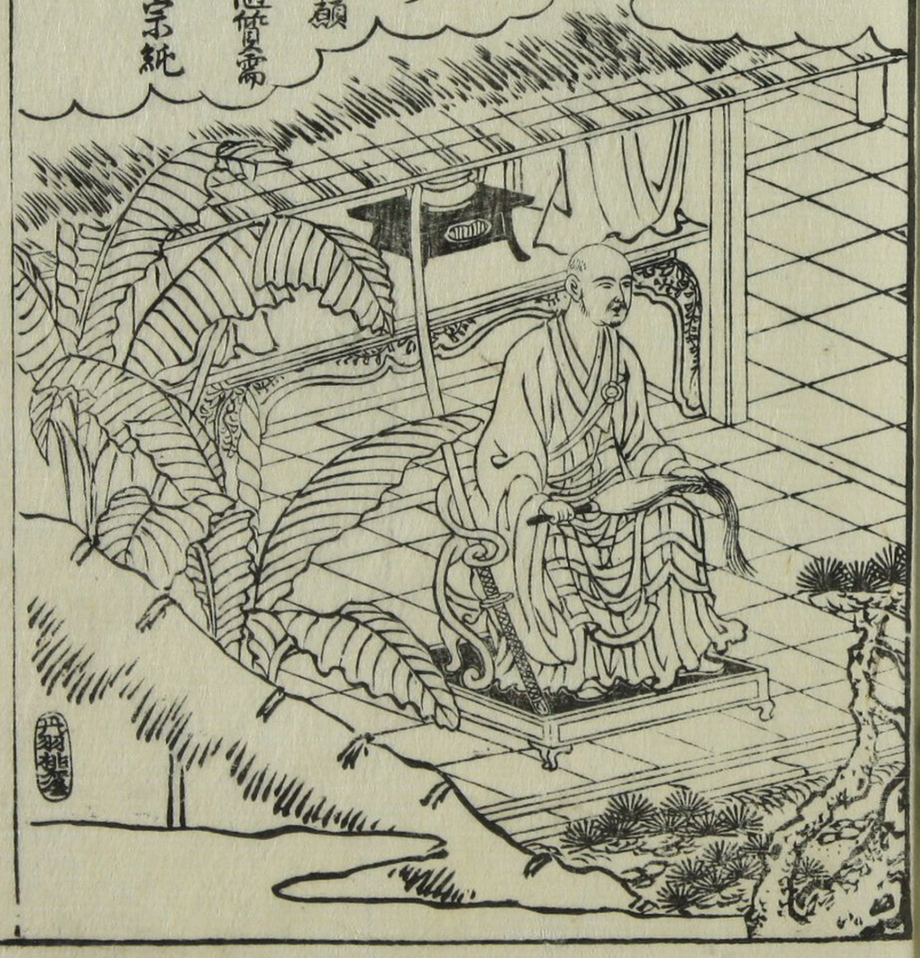
子安地蔵 はるさめの西毛ふあう本尊地蔵菩薩長六尺許

床菜菴
一休和尚
故棲



讃曰　一休和尚

唱下火宅寅旬裏轉
機輪竹篦飯掌抛
佛魔俱不覩吹
毛二尺揮動煙
蓋慣戰伯奥
七事随身、方
受敵雖多要津
呵佛罵祖傍若
無人淫坊酒肆獨
朗天真宗門泥梨
須還宗純抄



臨濟正法今墜地但願
祖教再興
成文菴菴主請予酒偈需
賛書以贈宋云
文安干卯臘月日　宗純

詠菜菴古蹟　住吉坂之井の村中ふあり　今菴室荒廃と云

[illegible]の門あり大海神の社人大領氏什寶一休自筆の軸物數品之内　淺小松殿の位牌
淺小松帝の落胤[illegible]れを什寶と安に其世のあらん傳寫次

大領氏什寶大畧

言外和尚像　贊
無端滅却大燈鐵眼銅睛劒樹牙
一句分明言外語　家
一休子宗純謹拜讀　親聞華叟若曇華

虛堂和尚像讃　贊
育王住院世皆稀　放下法衣如破鞋
臨濟正傳無一點　天風月滿吟懷
華叟和尚像讃　贊
東海兒孫一休宗純

靈山和尚像讃　贊
大燈子大應孫一會何妨三昧獨尊
大機大用正傳臨濟宗門
盧堂七世東海純一休拜

大應國師像讃　贊
看々佛日照乾坤天上人間唯獨尊
稱老如無渡東海扶桑國裏暗昏々
遠磨賢右前住大德一休謹贊

東土西天空弄神半身形像現全力
少林卅座成何事香至王宮梅柳春
前龍寶山大德禪寺純一休拜

天下光和尚讃題

一休和尚自賛

詩情禪味俱無能
盲女艷歌欺樓子
徒圖余陋質請賛
文明六年閏五月日
天澤七世東海順一休天下老和尚印

淺沢一つ橋のあるの宅地となつて殘れり

驚住工古蹟

履中天皇六年二月
后宮並爲墳於是二
天皇聞其數而問之曰何
強力輕捷由是獨勝越八
數耳　天皇悅其強力以喚之
恒居於住吉邑自是以後
脚咋別凡二族之
始祖也云

日本紀曰　喚鄉魚磯別王之女大郎姫高鸛
即葬納於　墳恒數之曰悲哉吾兄王何處去耶
天皇悔不得
數息他數曰妾兄弊住王爲人
強力輕捷山谷經多日不得面言故
恒居於住吉邑自是以後不絕來亦重使而呂猶不絕未
脚咋別凡二族之　以不絕來是讃岐國造阿波國
始祖也云

天澤七世東海純一休拜

安立町
難波屋
名松



世中ふしぎたりの
宮のうちなりくの
名物をかくる
貫之



王子祠　清き寺南にあり　後鳥羽院御宇記云承元
東山に王子の社ありと　熊野
しかれば則熊野遥拝の地と
熊野権現伊弉冊尊と云社人の説云九十九所の王子祠々々
天照太神と書しるせり　一説云若一王子
住吉名産　給観　俗ふ出見浜
の沖洲にあり　住吉の神馬の
秣とせしより神馬草と称ず　香附子
筆　安立町　諸国へ多く商人来る
住吉踊　住吉村より諸方へ出る　金奥
昔し　住吉の傘とひょうたん真似る人
傘の
都進上五月十八日より出見浜
俗ハ極女の
潮岸　正面の
安立町
小町茶屋　住吉の松原ふ上下往来
賑せゆえの人ふ茶ふ勧む
ゆえ
小町茶屋といえり
雑波屋松　安立町
株のある
住吉名物
諸方へ出る
松露　岸松の下真砂
の中ふあり
海藻　神功皇后
浅沢沼より
出る
燕子花
多く来る人
諸方へ
茶店ふ出し　柄の長き杓
備ふ　茶碗ふ
茶店乃
小町茶屋
雑波屋松
安立町を丁目
株のある七尺東西十五間南北十三間
柄杓
人々に来りて賞美せんと云事か



末社
三寶荒神

五百箇松原

今の安立町といふ昔は名松原と呼ばれし次第殘りなく松七本ありしが今七本松といふ歩王祠若小見えず

万

あれ姫る霞松原住吉社おもかげとめぬも　　景皇子　竹哥

小夜更て霞松原住吉の風そみをおくるらん　　和家

うら風のあれ松原をまとひ玉もせりめる住の江乃波　　定忠

帝堂

和尚延宝五年の建立と本堂に掛たる額に見えたり

安立町亀城寺ふもと禅宗曹洞法王山と号し開基を心越禅師と称す

よう仲野分鮫しく上るまで松つゝ閻羅の像ハ心越和尚大明より将来し水戸

祇園ハ初ハ水府黄門卿名伝ハ印紙ありて遷座

遠里小野

安立町の東ふもと里小野と称す古歌多く詠めり橋の実と池ふ綬て住吉社焼ふ用沙

万

住吉の岸松さへ小野の小そたりくとまる夜のさうりこそ

續古

はるたちを里をおく杜風ふもれそう夜いまやうらん　　中納言

續拾

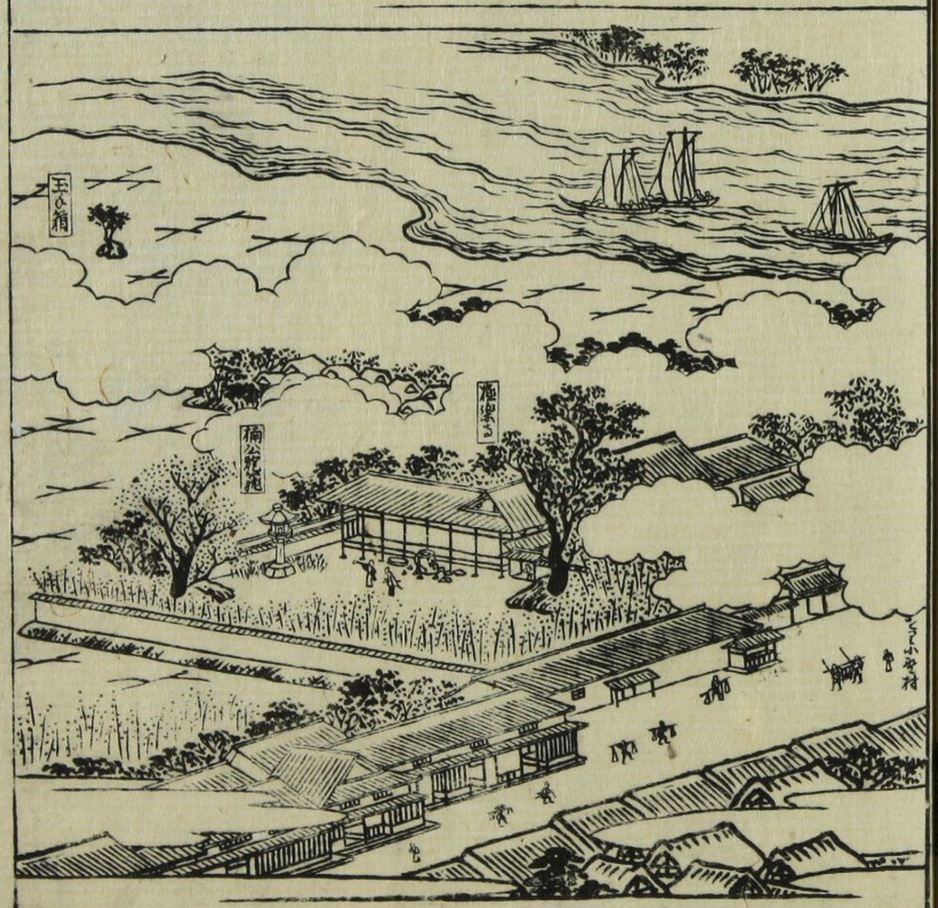
ゆるさいを里小のくちそうめそなみやこうひ高松うらまし　　左京竹敷一

遠里小野

檀波の名産住吉神領の社人献を

まえ

衛宵や
土近里小野
油賣
つゝたハ
とうの
後こうれ
聲
生へしこと



極楽寺 三里小野村にあり今州名と成りぬ傳ふ天智天皇の勅願寺と云

本尊毘沙門天 長三丈餘本尊と同体之

石燈籠 一基高一丈許蓮華座正成建之 其銘磨滅して見えず

朴津 遠里小野の南朴津谷之朴津村東に移りて今の名のこる 村民なし 朴津の真砂之故也

墨江の朴津ふたちてこそ物は思ふ恋人

万葉 すみのえ

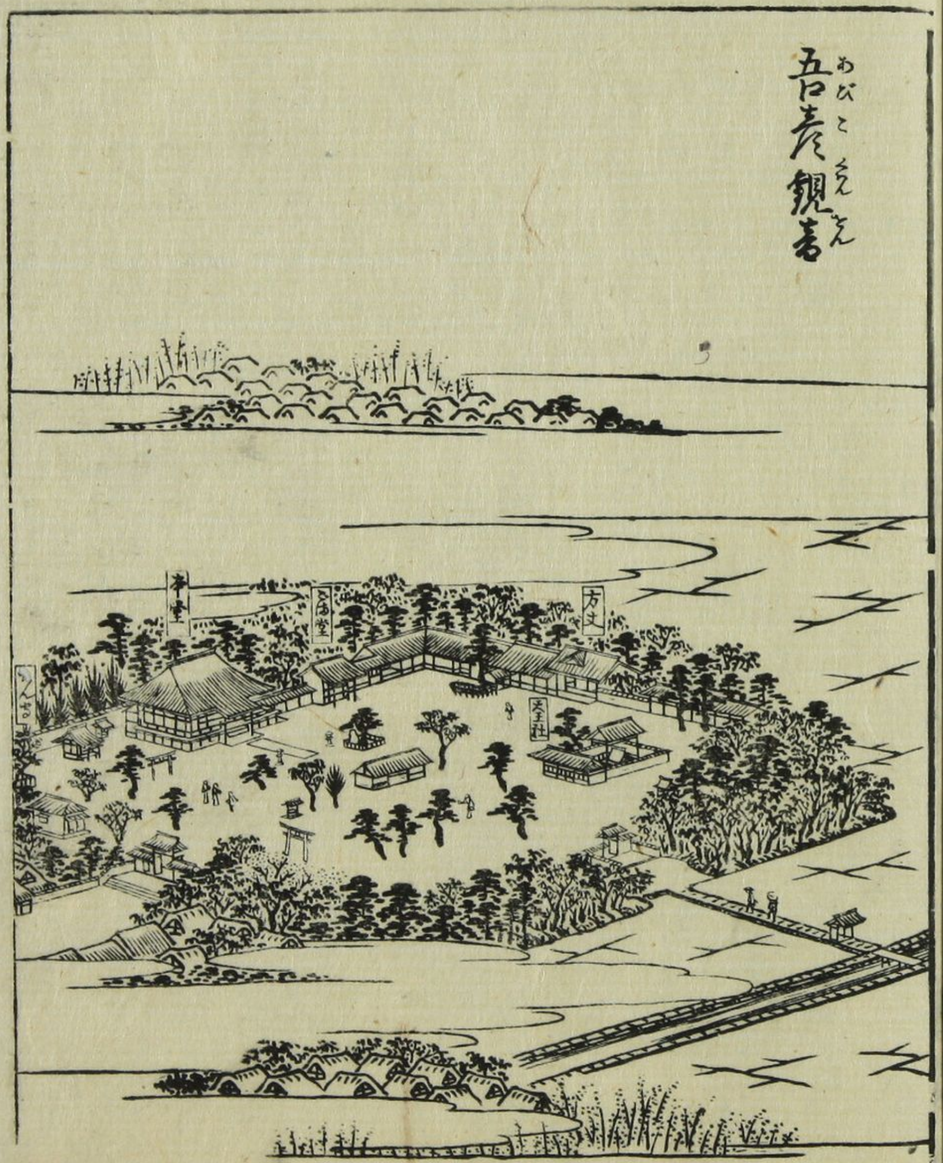
あしの小舟こぐとふ出でて日本紀神功皇后紀云 住吉大神現和魂居大津之渟中倉之長岸矣 是謂住吉三神也

玉の箱 三里小野村南二町許圓中ふ塚あり土人ちりて玉の箱と称して冢上ふ松を植ず 往古社頭の旧地と見えたり

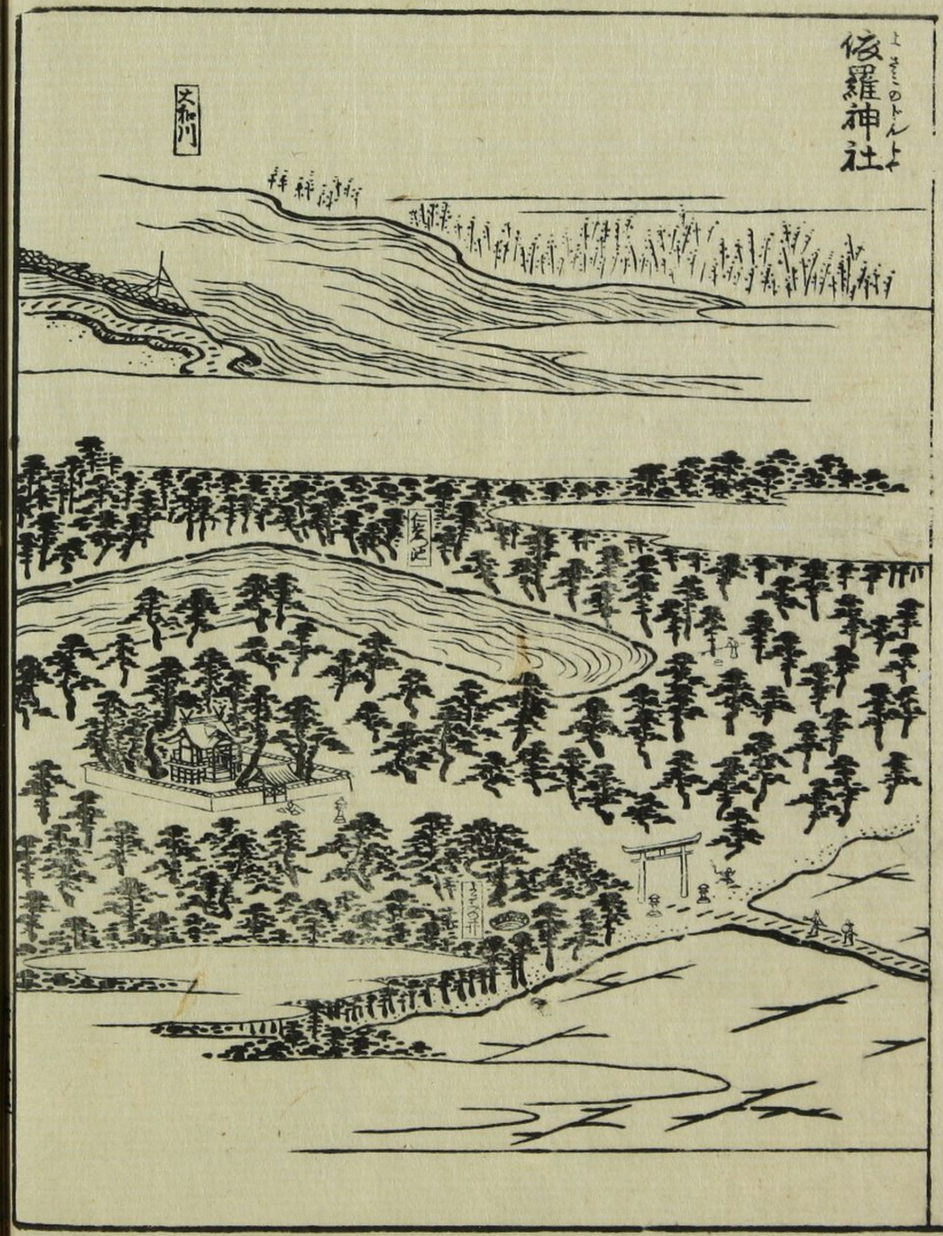
住吉志社の旧地と見えたり

住吉 住吉郡二十八町許ふあり今吾孫ノ村と称し日本紀神功皇后紀云 仮縄吾孫男命見之仁徳紀云 仮縄吾孫男命見之 万葉集 細ノ海と詠じ按津國廿一首の中ふあり むかしい海辺ちかく廿餘町 漕ぐと土人吾孫の孫の字ハ誤ヒコと唱へ吾孫ノ孫ノ字ハ誤ヒマゴと云ふ者之

吾孫ノ孫ノ海のあれわたりみの塩ふみ漕ぐらしてあり 作人未詳



吾孫観音



阿胡行宮　吾孫村あり神功攝政の時阿古久曾宮時進の贄を
大聖寺　我孫より村ありの名起る　開基法卜僧年二月初午日
盛長法卜僧年八歩泉州泉南郡和間の濱より出現
本尊聖観音　長さ一尺八寸　依正の二基の佛
業師堂　本尊業師日光月光　聖徳太子作佛
大師堂　弘法大師を　安置ス
護摩堂　本尊金色佛不動明王
五福天祠　吐枳尼天黒毘沙門　聖天
牛頭天王社　此所の生土神
鎮守　神功皇后を　祭ル
新大和川　水源和州より流ル　大和橋
住吉神輿火替所　大和街北ニ有リ六月晦日夜此所ニ於テ

攝泉名所圖會　卷之三

淺香丘　反忽堂村ふあり　林木蒼そうく邊邑住んと人家い生のえ繁く籬生しくく邊邑澤うくく眼下に見ゆあり

稻荷の祠　淺香ふあり山地の生土神とん例条八月十八日

淺香浦　淺香丘のえ北海をいく或云淺香ふ太子住ふ歩く淡路國より名香が奉仕太子に浦みく香魚を獻しとぞ万条

夕されハ塩こちさうん住吉の渉香の浦ふ玉もかりてん　新撰摠　行宗

住よし社渉香の浦ふ玉もかりてん　行能

新千

玉藻う方やいりこ苅家りけん渉香のうら社のあけ方の　岩明

舩玉神社　北花田宮村ふあり延喜式出今半頭天王と称に社前の生土神とん

鷹耳郡旧蹟　雪合村をいく日本紀曰　仁徳天皇四十三年秋九月阿陁古と云人を遣して百舌鳥の異鳥を捕しむ則韋鞲ふ其足ふつけ小鈴をとりく其尾ふけり脫の上ふ舌ふ出ふ名ふ俱知と云因茲酒君ふ号ハ鷹甘部を定り其雄を獻しとん

もゝしきの大宮人ハいとまあれや桜かざしてけふ一日くらす　後撰　読人不知

雄ふく天皇ふ上ハ是日酒舌ふ出ふ名ふ俱知と云因茲酒君ふ号ハ鷹甘部を定り其雄を獻しとん

鷹を飼人前を養耳邑と云今の養面の始メん是より養耳部を定り其雄を獻しとん

おくかのあれ作初瀬山いつかの春ハ見てかへるへき　公朝

旧　御狩野ハ今野の尾花ひくまてそ風をみしろ狩の春　顕仲

草津大歳神社　郡田村ふあり延喜式出今半頭天王と称に社前の生根神社と云生根神ハ住吉ふ鎮座の年倭姫命ふ奉遷の後摂津國ふ

平野の熊野権現



天下茶屋邑天滿宮　往古御遷ふありし系神なり例祭九月十五日　鏡の入滿宮の末社なり　原は里の産土神なりしが今は天王寺村の門うち入に新家の町　松戸の邑へ西成郡真町迄ハ但右郡なり此紀郡更に移れり

○紹鷗末

社頭の神籬豊臣秀吉公の賞じ給ひしものなりと村長曰此地名豊太閤已ぞ秀吉公攝政初ふ御往來の時此茶亭ふ立寄給ひしとて故ふ文字一茶屋といふ地名となんと

○名產和中散

高村ふあり津田氏といふ家傳云今より六世の祖父宗林といふ人初く貧弘むしと雖も志を勵まし醫業を營ミ遂ふ一家を成す其後子孫相繼ぎ業を怠らず今に至る

茶店ふ數十處を開き旅人を慰む

壺天閣といふ記あるを拔萃

距浪華城南可半里曰天下茶屋開鋪懸旗貨和中散者曰津田氏寛永年中其六世祖宗本翁肇基於茲又疾次男總左衛門別鋪近江梅木卯所謂是齊名遍海內是也海內無家不呼是齊也鋪前乃紀泉墨江一大條路無冬夏往來絡繹如織鋪內擺排數十床子中央休歇自置一大藥爐以施行客行客十之六七得副憑安永己亥歲

主人景殷於鋪後營一艸閣紹分荒陵水月上人問名於余既而十二日上人要邀余於閣伶家林君兄弟共登閣則須磨明石諸嶋獻笑于欄前平野曼衍中帶一水都人士女舟遊墨江絃歌遠近隱映牧點閣中景致南則墨江祠叢見乎津樹間以佳氣乃風帆沙鳥交相吸筮上蠻簫和奏二三弄海風傳響行雲為遏野翁余於是歡甚酌於人人之舖前篳喧埃塩率爾小詩其結曰誰識壺中別有天遂命曰壺天閣下暑

平野

住吉郡杭全郷中之一村高燈籠へ弐里半程の郡會の地なり郡名七箇屬村四邑大坂へ弐里半程

牛頭天王社

例系六月十四日

熊野二所權現

例系六月二日

觀音堂

原俊樂寺中なりしに後世ふいたり安置ふ

多寶塔

阿彌陀如來を安置ふ

影向松

門外の東ふあり

弁財天祠

傳ふ若一王子八王子を系ひ

大師堂

弘法大師の像を安置ふ

行者堂

役行者の像ふあり

末社

天照太神　天滿宮を始め其外連ねの所神樂殿

神樂殿

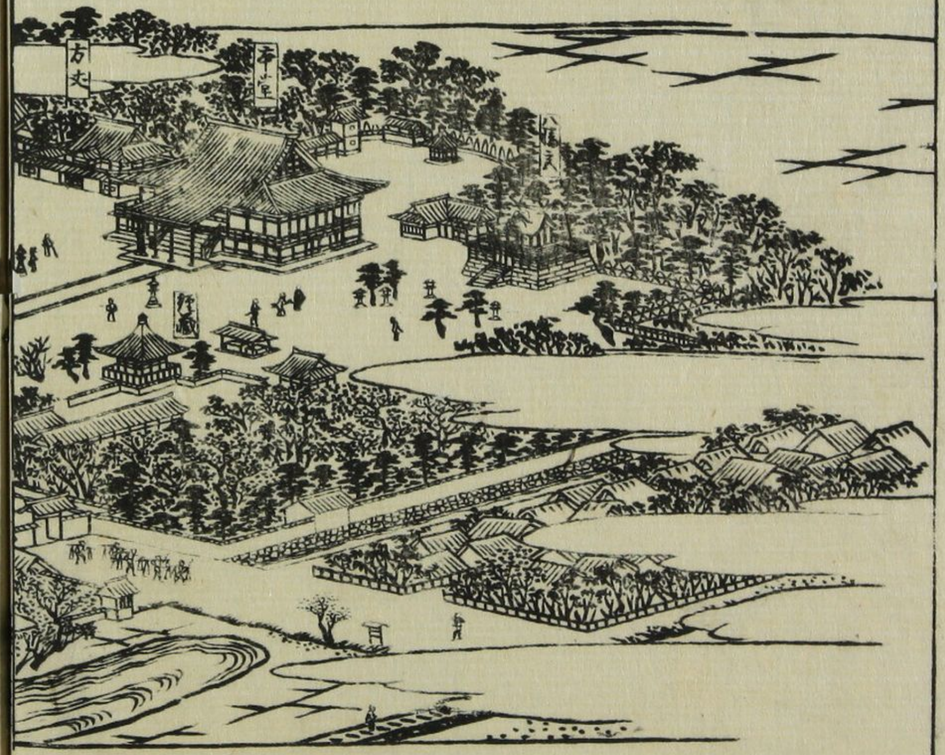
參籠所

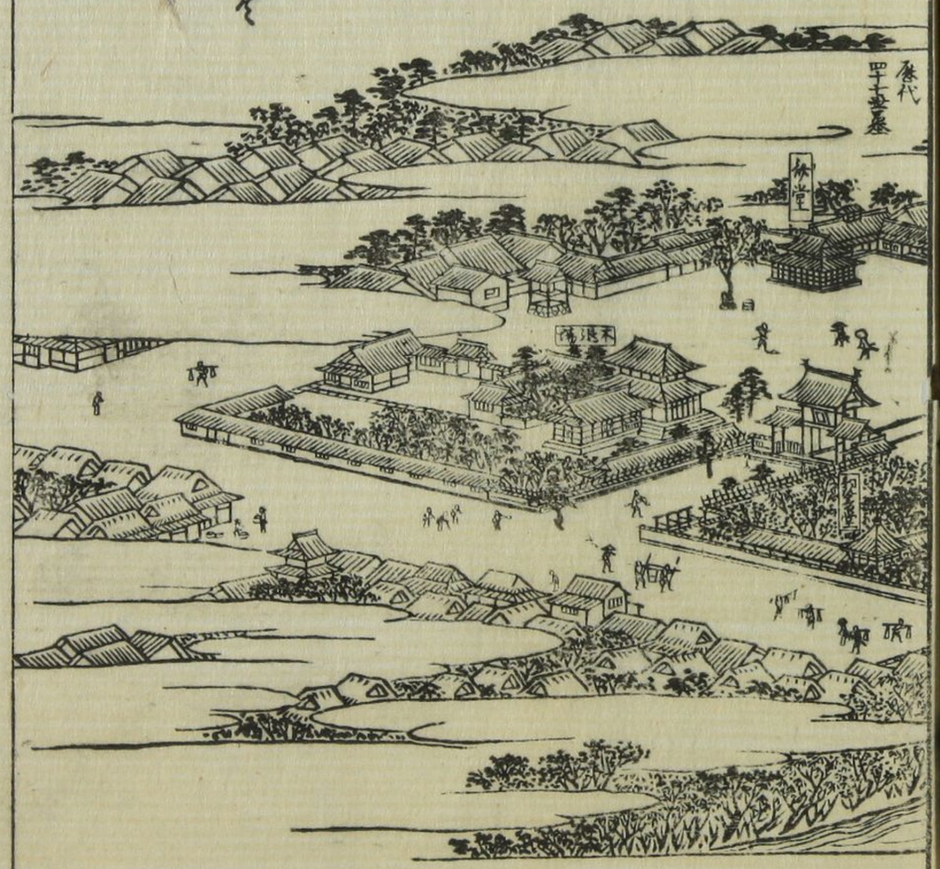
鳥居額

後醍醐天皇の宸筆ふて勅額と書ふ

社記曰住吉郡平野郷にむう〳〵杭全庄といひし〳〵分　後撰集帝乃沸時
坂上氏豊成朝臣の名ふるび後世小路〳〵訛りて豊成と
年中永師祇園より古松ふ移向松と名付
崇まり給向松
学ぞ神宮寺六坊を建立し弘法大師の法流を傳く爾部
習ふの称記と唱へ毎年六月九日系礼会執行ひ給ひ
此郷の惣堂町ふ茶師堂ありく本尊も沸自仏
剣ふくうう〳〵杭〳〵坊ふ奥の院と杭〳〵
然聖王朝勅願所権現殿大権現社
を人の山伏役を勤め社僧ふ命ぜられ
去ぬ其故今の社地ふ仏教
又社内ふ御手二本一株ふ生〳〵
其時人々奇異の思ひをなし
尊容備〳〵昂然聖王朝
之日御系図勅願所権現と崇め社を営ふ例年三月
崇峻帝役小角の化現と
多居の額然聖王朝権現と
又六町麻内やうく朝ふむう
磐光山修楽寺と
一宇寺僧六坊遷座
多像仏堂
迎隆十三村尊信

平野（ひらの）大念佛寺（だいねんぶつじ）





美福門院ホ極楽六時
讃の綸ホ初くつとめ
つとう仏名ホ後世
ホふ之報法を学く弥
陀を瞻仰ぢん

今そあれ八日会
みても
そひとり
みくみ仏国の
ゆくえれみを

皇太后宮大夫
俊成

本尊丈得如来　永久五年丁酉五月十五日大原良忍上人感得の十一尊
良忍上人像　中祖法明上人代々牌　常念佛間　融通
無導の塔　當寺代々牌　常念佛間　辯堂　上人像
不退場　本堂の巽ふあり　阿弥陀佛を安ず　齊堂　文殊と　観音堂　安ず
轉輪藏　本堂の左ふあり　鐘　一切経を藏む　本堂のふあり　鐘ハ日公府令旨
四十七世忍通上人　石表　門おふあり　八幡宮を祭る　累世塔　開山良忍上人
まその廟塔ニ　不許酒肉五辛入門内ニ云　當時
當山両祖繪詞傳曰良忍上人ハ原尾張國知多郡富田元恭道武
の子ニして母ハ熟田の祢賊の女之　後ニ條院延久四年壬子の元日ニ
誕生ニ十二歳の春　叡嶽都率谷恵心院良賀法印の許ニて経史ヲ
學び薙髪して本覺坊良忍と号ス　名ばく東塔の西谷無動寺ニ
一千日籠ニ居遁の心切を積ニ二十三才の秋本意のごとく大乗の奥
ふかくれのひかくわん誦ニゆひなる
のうれてもえさをゆるさひきそをむ大乗のおく　良忍

（古筆切）
（聞被世人知住處更移茅舍入深居）
それ人うえもたつのあるをもたにも春ハ色せくみねの谷より入る身を　仝
斯く　名羽院永久五年六月十八日上人四十六才時弥陀佛融通念佛の
弘法未世の衆生ニ勧誘せん事を悪若しや抑融通念佛とハ一人の行を
ひく衆人の行とひく衆人の行ハ一人の行とをるハ功徳廣大之是
往生の順次なるべし一人往生ハ遅ハ衆生ハ速ハ当寺の
うえんと空中より一佛十聖衆の羅穀九旗と授與しゆまれ当寺の
本尊之一日異人来謁しく曰願ハ融通念佛を四海ニ弘めよく我も亦
天神地祇と倡せん良忍向て曰公ハ誰や對て云鞍馬寺毘沙門天之と
藉と呈しそ見へ次ニ去より融通念佛を修し聲明梵唄紙鉦と
四衆を勧むこと仁二年ニ大原来迎院と創しく大蔵經律論を皮ひく名て
如来藏といへ持ちる所の弥陀経時々光を放ツ　光ハ釋書ニ　大意
日課ハ修しく菅神も亦二千遍の日課を授ケ其示現の文ニ曰　名羽帝も

天神本地身　十一面薩埵　為度衆生故　示現天神體
我本師弥陀　為報恩頂戴　毎日称名号　滿一百八遍

以是念佛故　悉授與於汝　汝行三千遍　亦授與於我
融通功德力　甚深亦甚深　如是修行者　受生生極樂

良忍上人終ふ長承元年二月朔日入寂　年六十一　迹年安永二年十月十六日
勅して聖應大師と贈号あり中祖法明上人ハ洛東右京亮守道の子之弘安
二年十月十日ふまた廿五支の業故郷を出々る時かくぞ詠ん

世の中はかくれみのうの名を今や出なん　法明

ふ一首を書く高野ふ登つて後ハ良忍上人
八幡宮ふおさめ置ふ法明上人神詫ふより此州交野郡茄子ハ村
ふ於て之を授つ人因茲毎年霜月十六日茄子ハおく佛堂供養ふ
とかやの示現ふより融通念佛の宗風を再興し真上播州加古の
教信の若もの是ふ念佛宗をとふ弘通し遂ふ貞和五年六月
十二日入寂　年七十九

○毎年二月ふ和州吉野の濱供養ハ
鏡祭ふ係く吉野ふ勝
天台の一臈ふ受く一ふ勝
ふ於ふ一ふ勝

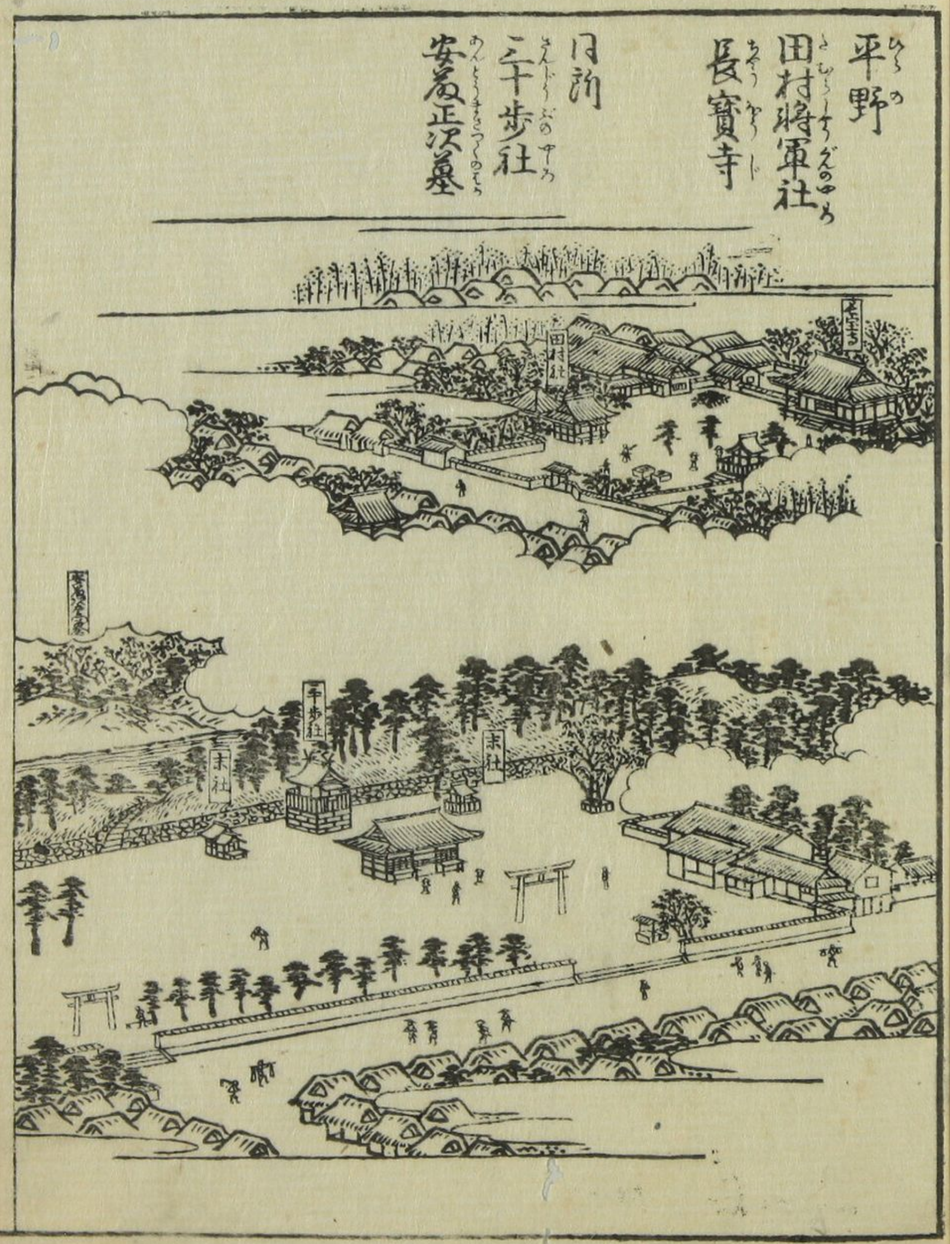
時尚園西成郡濱村源光寺ふ
ふ本尊ふ藏王堂ふ納人經て後
明神并ふ藏王堂ふ納人經て後
當ハ寺ふ於ふ一ふ勝

含翠堂

平野郷中ふ有り今ハ土橋七右ふ衛友直と
経史を學ぶ事二年の後故郷ふ歸り遂ふ庭中ふ
て訓ふく講堂ふ改む友直ハ享保二年の後
田畝二五七十をかく清原の萬年先生東武
の就齋先生等ふ從ひ學ふ事十有餘年の後
歸ふ及ぶ故郷ふ於ふ井上佐兵衛正臣が居宅
の古松の傍ふ舍翠堂と號し洛翠の萬年先生東武
の就齋先生等ふ從ひ學ふ事十有餘年の後
歸ふ及ぶ故郷ふ於ふ井上佐兵衛正臣が居宅
の古松の傍ふ舍翠堂と號し洛翠の萬年先生東武

亀鐘

天王寺ふ於ふ融通大念佛會執行
人供奉の役仕ふより太閤と
種昔
鑄ふる所ふ鐘ふ頒ふ什寶ふより海内



東涯先生の舍翠堂の記あり其文曰

舍翠堂記

昔者子游為武城宰以禮樂為治夫子告之曰割鷄焉用牛刀及子游再舉嘗所聞之語乃實以而所以鼓舞陶鑄化民也小而言之前成俗莫先於禮樂大而治之攝師儒以問道土橋友直社學會田有名曰舍翠又將置學招古譚日講習數家謀置時時定以為講習之所其姓有氏宇子游因

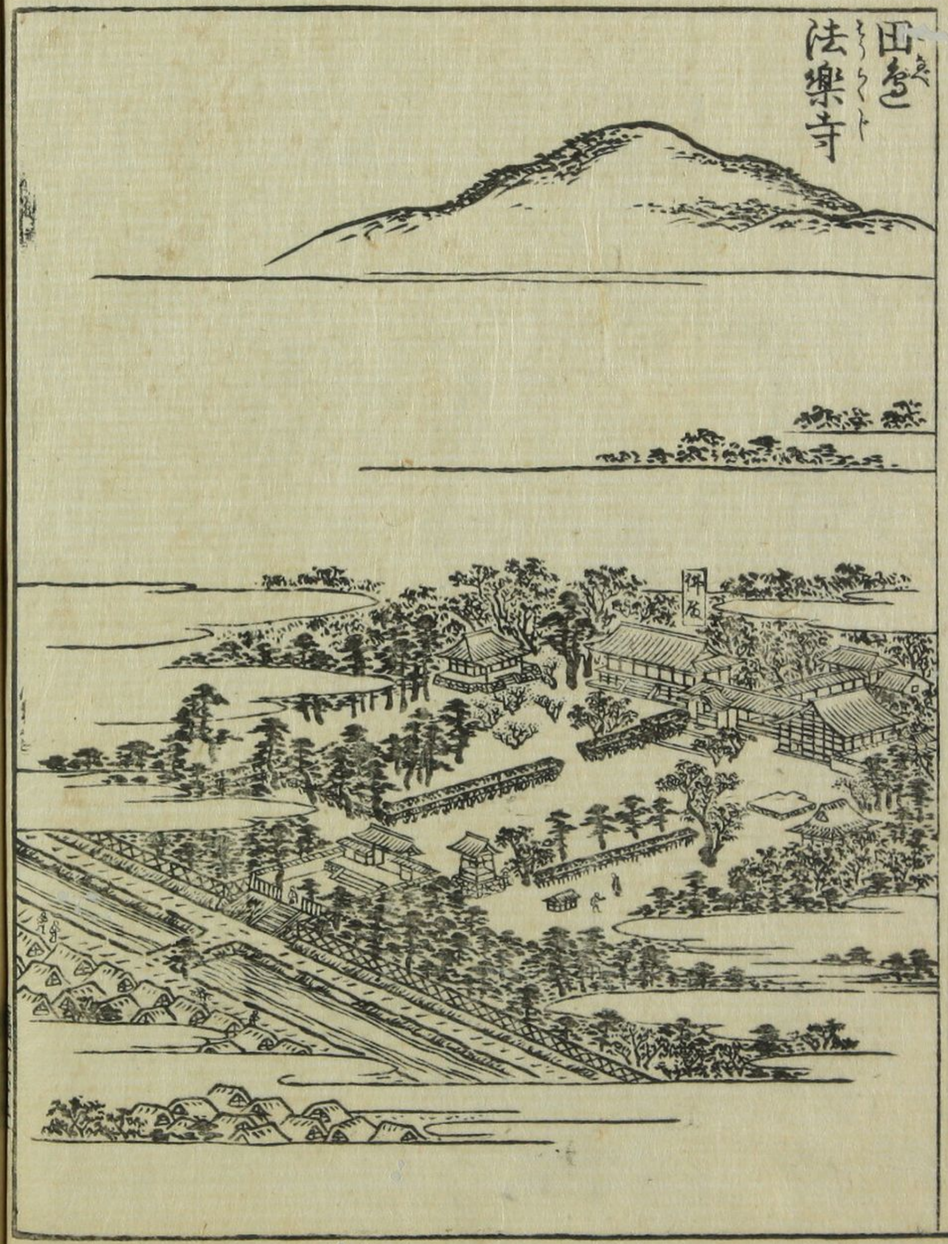
於合翠堂
東涯先生
講筵



丹治桃蹊

曲禮凡講問之
席間丞丈也
容丈足以指
畫之





田邑法樂寺

惠光寺　平野郷にあり　東本願寺に属す　本願寺の大徳山と称す
開基蓮淨上人　本願寺第八代蓮如上人の長男之
安和の昔脇極に開祖親鸞聖人等身の彫刻安置
す蓮如上人六十六才自作の像あり蓮淨師へ附属
之

本尊阿弥陀佛　聖徳太子作之

金輿寺　同郷平堂町にあり　本尊薬師佛　聖徳太子
斗頭天王の奥院と称す　作之

安藤次右衛門正次墓　平野郷通尻口にあり　元和元年五月七日
山表にそ　戦死

平野川　喬名西海川と書く　河州竹渕より流く
平野郷より東成郡へ入

栗塚　綿車　擣車
元祖黒木　勝館

法樂寺　南田辺村にあり　宗旨四宗兼学　本郷山と書く
駒ヶ瀧山と号す　開山は芙蓉和尚の弟子
源頼朝公念持佛背面銘云ク左馬頭源義朝一乃二禮
久安二年丙寅二月十八日　法眼湛幸作之

本尊如意輪観音　聖徳太子作
佛舎利　二顆　寶塔ニ安ス　傳云ふ弘法大師入唐の節
勝る所之舎利記の跋ふ云
青一王　請一来ノ舎一利　二顆　紫黄　二亀　貯ヲ舎利水晶壺
及ヒ外一圍錦ノ袋ヲ併テ布ノ櫃ニ雑綵ノ坐圓ヲ施ス　舎利塔ニ安ス　舎利櫃上ニ蜀
錦ノ袋ヲ下　器一治兼三年己亥七月一日

釋迦佛　方丈ふ安ス　弘法大師作と称す
退去閣ふあり　東湖安穏寺村安置ありしを中古当寺へ遷ス
十一面観音　方丈ふ安ス　西明寺入道時頼の作
今歓喜天の本地佛と称す

鑑実(松葉權現)を祭祀
寺記云
嵩山に治暦二年小松内府重盛公開創の地之其比内府佛道を深
く一門菩提の為にとて宋國育王仏照國師の英風を慕ひ祠堂
料として黄金三千両を賜る國師其厚志感じて仏舎利二顆并
献ず昇化比仏字を建て内府總追系統の附法を立書して為成し
殿堂壮麗あらそふ魏々たり正の兵火罹て灰燼となり今門おも大門
迄ありいわゆる一の大門の外に舎利田として内府を盛仏供に當ぜられ
し田園と今字とある法楽寺小松院のお額の寶鏡寺官理豊徳巌尼公
の御筆梵鐘の銘は東湖湛堂律師の撰と寺の由致を著せ方丈書院
玄関の襖板は唐筆なれど牧板之非
熱門は和州宇陀城より移し一三間の書院内府公中華育王山より黄金を渡されし事古来より様々の説あり實説
未だ見ず依て黄金を渡されし報酬として石鴨の阿弥陀経を日本へ
齎る今現在多添像神の社頭ありと其寔一の石経系師知恩寺ふ
あり一心不乱の已下廿一字と補益あり云々
武家俗説辨云小松内府重盛仏法を信し妙典とし人日本ふ有り経巻ふ
重盛が後生菩提を弔ふ為の金を渡して云々弐百あい醫王山へ納て備ふ
妙典ふ別ふ金百両をめて献ず重盛ふ異國へ何ぞ求ふらん醫王
山ふ一字を建立して添く寄ふ有く勅書を賜りしと云々重盛ふ
ふ載ふ熟ふ重盛一生の行状を考るふ仁義を專とし善根を旨とふ
さありたる中興の君ふ人故ふ父清盛の悪行をも和陳しめ
ふうかゞふ仏法を信し妙典を尊ふ
ふ犯され醫術ふ法くを及ばず
日本にあり但せつ父入道ふ
をくむ重盛ふ当ふ
異邦の醫師の薬ふ用ひ
服ちたりけるとかや
あるふや法乃後世
田毛神祠 南田毛村ふあり山阪明神と称ふ祈の生土神之例条五月二日
授従五位下云々
雨池 南田毛ふあり 池田池 周廻四百畝

八幡宮　桑津村にあり土人云應神帝十三年髮長媛をしたがへ
八幡宮と崇む

鷲住王塚　住吉より五町許北
街道の東にあり

大伴金村塚　旧跡にあり土人はおおとものかなむらづかと
んく訛なむり住吉
よりたに足らず此所一堆の岡山なり
昔は北の
海にて住吉の社頭みへ天王寺の
塔も
鷲住の風景炳然たりしと
後の東人此人訛りてくく真名
大跡王と
成未國之國造
の築小居し金村のち大伴狹手
彦高麗
征伐攻る
迯小國中を
平治しくく大小功あり